



インストール・ガイド



インストール・ガイド

ご注意

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、83ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

IBM 発行のマニュアルに関する情報のページ

<http://www.ibm.com/jp/manuals/>

こちらから、日本語版および英語版のオンライン・ライブラリーをご利用いただけます。また、マニュアルに関するご意見やご感想を、上記ページよりお送りください。今後の参考にさせていただきます。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： GI11-8355-06
Rational® Systems Developer
Version 7.0.5
Installation Guide

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2007.11

© Copyright International Business Machines Corporation 2004, 2007. All rights reserved.

目次

概説	1	その他のプラットフォームでの Installation Manager のサイレント・アンインストール	34
IBM Installation Manager	1	電子イメージの確認および解凍	35
インストール要件	3	ダウンロードしたファイルの解凍	35
ハードウェア要件	3	ランチパッド・プログラムからのインストール	37
ソフトウェア要件	3	ランチパッド・プログラムの開始	38
ユーザー特権についての要件	6	ランチパッド・プログラムからのインストールの開始	38
インストール計画	7	Installation Manager GUI の使用による Rational Systems Developer のインストール	39
インストール・シナリオ	7	サイレント・インストール	43
インストールするフィーチャーの決定	8	Installation Manager による応答ファイルの作成	43
フィーチャー	9	Installation Manager インストーラーによる応答ファイルの記録	44
アップグレード、および共存についての考慮事項	17	サイレント・モードでの Installation Manager のインストールおよび実行	45
製品の共存についての考慮事項	17	すべての使用可能な製品の検索とサイレント・インストール	46
アップグレードに関する考慮事項	18	現在インストールされているすべての製品に対する更新のサイレント・インストール	47
インストール・リポジトリ	18	応答ファイルのコマンド	47
Installation Manager のリポジトリ設定	18	サイレント・インストール設定コマンド	48
パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリ	19	サイレント・インストール・コマンド	50
既存の Eclipse IDE の拡張	20	参照: サンプル応答ファイル	54
プリインストール・タスク	23	サイレント・インストール・ログ・ファイル	55
インストール作業	25	ライセンスの管理	57
Rational Systems Developer の CD-ROM からのインストール: タスクの概要	25	ライセンス	57
ワークステーション上の電子イメージからの Rational Systems Developer のインストール: タスクの概要	26	ライセンスの使用可能化	58
電子イメージからのインストール	26	インストール済みパッケージのライセンス情報の表示	59
共用ドライブ上の電子イメージからの Rational Systems Developer のインストール: タスクの概要	27	プロダクト・アクティベーション・キットのインポート	59
HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからの Rational Systems Developer のインストール: タスクの概要	27	フローティング・ライセンスの使用可能化	60
HTTP Web サーバー上への Rational Systems Developer の配置: タスクの概要	28	ライセンスの購入	61
IBM Installation Manager の管理	31	Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす	63
Windows への Installation Manager のインストール	31	Rational Systems Developer の開始	65
Linux への Installation Manager のインストール	31	インストールの変更	67
Windows での Installation Manager の開始	32	Rational Systems Developer の更新	69
Linux での Installation Manager の開始	32		
Windows での Installation Manager のアンインストール	32		
Linux での Installation Manager のアンインストール	33		
Installation Manager のサイレント・インストールとアンインストール	33		
Installation Manager のサイレント・インストール	33		
Windows からの Installation Manager のサイレント・アンインストール	33		

前のバージョンへの更新の復帰	71
Rational Systems Developer のアンインストール	73
IBM Packaging Utility	75
Packaging Utility のインストール	75
Packaging Utility を使用した HTTP サーバーへの製品パッケージのコピー	76

オプション・ソフトウェアのインストール 79	
ClearCase LT のインストール	79
ClearCase LT のインストール説明およびリリース情報の探索	79
Rational ClearCase LT のインストールの開始	80
Rational ClearCase LT ライセンスの構成	81
特記事項	83
商標	84

概説

このインストール・ガイドには、IBM® Rational® Systems Developer のインストール、更新、およびアンインストール方法が記載されています。

この「インストール・ガイド」の最新版は、http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/rationalsdp/v7/rsd/705/docs/install_instruction/install.html でオンラインで入手可能です。

注: 文書の更新内容やトラブルシューティングの情報については、<http://www.ibm.com/software/rational/support/documentation/> を参照してください。

IBM Installation Manager

IBM Installation Manager は、コンピューターに Rational Systems Developer 製品パッケージをインストールするために役立つプログラムです。インストールされているすべてのパッケージの更新、変更、およびアンインストールにも使用できます。パッケージとは、具体的に Installation Manager でインストールできるように設計された製品、コンポーネントのグループ、または単一のコンポーネントです。

IBM Installation Manager は、次のタスクを短時間で実行できる便利なフィーチャーを提供します。

- 製品パッケージのインストール
- インストール済み製品パッケージのライセンス管理
- インストール済み製品パッケージの更新の検索およびインストール
- インストール済み製品パッケージの変更
- インストール済み製品パッケージの前のバージョンへの復帰
- 製品パッケージのアンインストール

IBM Installation Manager について詳しくは、Installation Manager のインフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1m0r0/index.jsp>) を参照してください。

インストール要件

このセクションでは、ソフトウェアを正常にインストールし、実行するために満たす必要がある、ハードウェア、ソフトウェア、およびユーザー特権の要件について説明します。

ハードウェア要件

製品をインストールする前に、ご使用のシステムが最小ハードウェア要件を満たしていることを確認してください。

ハードウェア	要件
プロセッサ	最小: 800 MHz Pentium® III (最適な結果を得るためにはそれ以上)
メモリー	最小: 512 MB RAM
ディスク・スペース	最小: 1 GB のディスク・スペースが、製品パッケージのインストール時に必要です。さらに、開発するリソース用の追加ディスク・スペースが必要になります。 注: <ul style="list-style-type: none">• ディスク・スペース要件は、インストールするフィーチャーによって増減する場合があります。• この製品をインストールするための製品パッケージをダウンロードする場合は、追加のディスク・スペースが必要になります。• Windows® の場合: NTFS の代わりに FAT32 を使用する場合は、追加のディスク・スペースが必要になります。• Windows の場合: ご使用の環境変数 TEMP でポイントされる TEMP ディレクトリーに、追加で 500 MB のディスク・スペースが必要となります。• Linux® の場合: 追加で 500 MB のディスク・スペースが /tmp ディレクトリーに必要となります。
ディスプレイ	最低でも 256 色を使用する 1024 x 768 解像度 (最適な結果を得るためにはそれ以上)
その他のハードウェア	Microsoft® マウスまたは互換のポインティング・デバイス

ソフトウェア要件

製品をインストールする前に、ご使用のシステムがソフトウェア要件を満たしていることを確認してください。

オペレーティング・システム

この製品の 32 ビット・モードでサポートされるオペレーティング・システムは、次のとおりです。

- Microsoft Windows XP Professional (Service Pack 1 または2)
- Microsoft Windows XP Professional x64 Edition (AMD または Intel® プロセッサで稼働)
- Microsoft Windows 2000 Professional (Service Pack 4)
- Microsoft Windows 2000 Server (Service Pack 4)
- Microsoft Windows 2000 Advanced Server (Service Pack 4)
- Microsoft Windows Server 2003 Standard Edition (Service Pack 1)
- Microsoft Windows Server 2003 Enterprise Edition (Service Pack 1)
- Microsoft Windows Vista Business、Windows Vista Enterprise、および Windows Vista Ultimate
- Red Hat Enterprise Linux Workstation バージョン 4.0
- Red Hat Enterprise Linux Workstation バージョン 5.0
- Red Hat Enterprise Linux Desktop バージョン 4.0
- Red Hat Enterprise Linux Desktop バージョン 5.0
- SUSE Linux Enterprise Server (SLES) バージョン 9 (すべての Service Pack)
- SUSE Linux Enterprise Server (SLES) バージョン 10
- SUSE Linux Enterprise Desktop バージョン 10
- Citrix Presentation Server (次のオペレーティング・システム環境):
 - Microsoft Windows Server 2003 Standard Edition
 - Microsoft Windows Server 2003 Enterprise Edition
- Sun Solaris 10 (SPARC プロセッサで稼働)

リストされているオペレーティング・システムでは、Rational Systems Developer でサポートされるすべての言語がサポートされます。

既存の Eclipse IDE を拡張する場合のソフトウェア要件

このバージョンの IBM Rational Software Delivery Platform の製品は、Eclipse IDE バージョン 3.3.1 以降での使用を前提に、開発されました。既存の Eclipse IDE の拡張は、eclipse.org から提供される最新の更新が適用されたバージョン 3.3.1 でのみ可能です。

既存の Eclipse IDE を拡張するには、以下のいずれかの Java™ 開発キットの JRE も必要です。

- Windows の場合: IBM 32 ビット SDK for Windows、Java 2 Technology Edition バージョン 5.0 サービス・リリース 5、Sun Java 2 Standard Edition 5.0 Update 12 for Microsoft Windows
- Linux の場合: IBM 32 ビット SDK for Linux (Intel アーキテクチャー上)、Java 2 Technology Edition バージョン 5.0 サービス・リリース 5、Sun Java 2 Standard Edition 5.0 Update 12 for Linux x86 (SUSE Linux Enterprise Server [SLES] バージョン 9 ではサポートされません)

注:

- Sun Java 2 Standard Edition (Java SE) ランタイム環境 (JRE) 6.0 はサポートされていません。
- 更新を Rational Systems Developer にインストールするには、Eclipse バージョンの更新が必要な場合があります。前提となる Eclipse バージョンへの変更については、更新情報のリリース文書を参照してください。

重要: 管理者特権を持たないユーザーが Rational Systems Developer を Windows Vista システム上で作業するには、Program Files ディレクトリー (C:\Program Files) 内に Eclipse を選択しないでください。

追加のソフトウェア要件

- Linux の場合: GNU Image Manipulation Program Toolkit (GTK+) バージョン 2.2.1 以降および関連ライブラリー (GLib、Pango)。
- 以下の Web ブラウザーのいずれか (README ファイルと「インストール・ガイド」を表示し、Standard Widget Toolkit (SWT) ブラウザー・ウィジェットをサポートするために必要です)。
 - Windows の場合: Microsoft Internet Explorer 6.0 (Service Pack 1 以降)。
 - Mozilla 1.6 以降
 - Firefox 1.0.x, 1.5, 2.0 以降

注:

- Red Hat Enterprise Linux Workstation バージョン 4.0 では、環境変数 MOZILLA_FIVE_HOME を、Firefox または Mozilla インストールが入っているフォルダーに設定する必要があります。例えば、setenv MOZILLA_FIVE_HOME /usr/lib/firefox-1.5 です。
- SWT ブラウザー・ウィジェットをサポートするには、Firefox ブラウザーをリンク可能な Gecko ライブラリーとコンパイルしておく必要があります。現時点では、mozilla.org からダウンロードする Firefox はこの基準を満たしていませんが、主要な Linux ディストリビューションに組み込まれている Firefox のインストールでは一般にサポートされています。

注: ランチパッドでは Mozilla 1.6 がサポートされていません。ご使用のブラウザーが Mozilla の場合にランチパッドを実行するには、バージョン 1.7 以降が必要です。

- ツアー、チュートリアル、およびデモンストレーション・ビューレットなどのマルチメディア・ユーザー支援を正しく表示するには、Adobe® Flash Player をインストールする必要があります。
 - Windows の場合: バージョン 6.0 リリース 65 以降
 - Linux の場合: バージョン 6.0 リリース 69 以降

注: Windows Vista オペレーション・システムでは、サンプル・ギャラリーおよびチュートリアル・ギャラリーは、新しい高解像度のディスプレイ設定「大きなサイズ (120 DPI) - テキストを読みやすくする (Larger scale (120DPI) - make text more readable)」をサポートしていません。このオプションが設定されている場合、ギャラリーのコンテンツは表示されません。新しい高解像

度ディスプレイのオプションに変更した場合は、低解像度の設定 (例えば、デフォルトの 90 DPI の設定など) に変更する必要があります。

日本語版の Windows Vista オペレーティング・システムで、サンプル・ギャラリーおよびチュートリアル・ギャラリーを表示するには、Web ブラウザーの設定として Mozilla Firefox が必要です。ギャラリーのコンテンツは他の Web ブラウザーでは表示されません。ギャラリーを実行するには、Mozilla Firefox をインストールし、Web ブラウザーの設定を Mozilla Firefox に設定します (製品のメインメニューで、「ウィンドウ」→「設定」→「一般」→「Web ブラウザー」をクリックします)。

- サポートされるデータベース・サーバー、Web アプリケーション・サーバー、およびその他のソフトウェア製品については、オンライン・ヘルプを参照してください。

ユーザー特権についての要件

Rational Systems Developer をインストールするには、以下の要件を満たすユーザー ID が必要です。

- ユーザー ID には 2 バイト文字が含まれてはいけません。
- Windows の場合: インストール時に必要となるユーザー特権は、ご使用のコンピューターの Windows バージョンによって決まります。
 - **For Windows Vista の場合**、管理者アカウントでログインして、次のタスクを実行します (または、プログラム・ファイルまたはショートカットを右クリックし、「管理者として実行」を選択して、管理者として実行してください)。
 - IBM Installation Manager のインストールまたは更新
 - 製品オファリングをインストールまたは更新します。
 - IBM Installation Manager を使用して、ご使用の製品の許可ユーザー・ライセンス・キーをインストールします。

注: 管理者ではないユーザーが Windows Vista システム上で Rational Systems Developer を作業するには、以下の点に注意してください。

- Rational Systems Developer を、Program Files ディレクトリー (C:¥Program Files¥) のパッケージ・グループ (インストール・ロケーション) にインストールしないでください。また、Program Files ディレクトリーの共用リソース・ディレクトリーを選択しないでください。
 - 既存の Eclipse インストールを拡張している場合、Program Files ディレクトリー (C:¥Program Files¥) に Eclipse をインストールしないでください。
 - サポート対象である、その他の Windows バージョンの場合、管理者グループに属するユーザー ID を使用する必要があります。
- Linux の場合: root としてログインする必要があります。

インストール計画

どの製品フィーチャーをインストールまたは更新する場合にも、事前にこのセクションのすべてのトピックをご一読ください。効果的なプランニングと、インストール・プロセスの主要な段階を理解することが、インストールの成功につながります。

インストール・シナリオ

Rational Systems Developer をインストールまたは更新する際に使用できるシナリオは多数あります。

Rational Systems Developer バージョン 7.0.5 リフレッシュ・パックは、ご使用のコンピューターにインストールされている Rational Systems Developer のバージョン 7.0、バージョン 7.0.0.1、バージョン 7.0.0.2、バージョン 7.0.0.3、またはバージョン 7.0.0.4 の更新としてインストールすることができます。また、このリフレッシュ・パックは、Rational Systems Developer の新規インストールとしてインストールすることもできます。

以下に、インストール・シナリオを決定するいくつかの要素を挙げます。

- インストール・ファイルにアクセスするとき使用する形式および方式 (例えば、CD からアクセスする、IBM パスポート・アドバンテージ® からダウンロードしたファイルからアクセスするなど)。
- インストールのロケーション (例えば、ご自身のワークステーション上に製品をインストールしたり、インストール・ファイルを企業内で使用できるようにしたりすることができます)。
- インストールのタイプ (例えば、Installation Manager の GUI を使用したり、サイレント・インストールを行うことができます)。

典型的なインストール・シナリオには、以下のものがあります。

- CD からのインストール。
- ワークステーションにダウンロードした電子イメージからのインストール。
- 共用ドライブ上の電子イメージからのインストール。
- HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからのインストール

後の 3 つのシナリオでは、サイレント・モードで Installation Manager プログラムを実行して、Rational Systems Developer をインストールすることを選択できます。Installation Manager のサイレント・モードでの実行について詳しくは、43 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。

基本製品パッケージのインストールと同時に更新もインストールできることにも注意してください。

CD からのインストール

このインストール・シナリオでは、お客様は製品パッケージのファイルが含まれている CD を持っており、通常は、ご自身のワークステーション上に Rational Systems Developer をインストールします。このステップの概要については、25 ページの『Rational Systems Developer の CD-ROM からのインストール: タスクの概要』を参照してください。

ワークステーションにダウンロードした電子イメージからのインストール

このシナリオでは、お客様は IBM パスポート・アドバンテージからインストール・ファイルをダウンロードしており、ご自身のワークステーション上に Rational Systems Developer をインストールします。このステップの概要については、26 ページの『ワークステーション上の電子イメージからの Rational Systems Developer のインストール: タスクの概要』を参照してください。

共用ドライブ上の電子イメージからのインストール

このシナリオでは、お客様は共用ドライブ上に電子イメージを置いて、社内のユーザーが 1 つのロケーションから Rational Systems Developer のインストール・ファイルにアクセスできるようにします。このステップの概要については、27 ページの『共用ドライブ上の電子イメージからの Rational Systems Developer のインストール: タスクの概要』を参照してください。

HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからのインストール

このシナリオは、ネットワークを通じて製品をインストールする最速の方式です。HTTP または HTTPS Web サーバー上に Rational Systems Developer の製品パッケージ・ファイルを置くには、IBM Packaging Utility というユーティリティー・アプリケーションを使用して、HTTP または HTTPS Web サーバーから直接 Rational Systems Developer をインストールする場合に使用できるパッケージ・フォーマットにインストール・ファイルをコピーする必要があります。このユーティリティーは、Rational Systems Developer に添付されています。パッケージが含まれている HTTP または HTTPS Web サーバー上のディレクトリーは、リポジトリと呼ばれます。Rational Systems Developer インストール CD に収録されているオプション・ソフトウェアは、パッケージには含まれません。パッケージに含まれるのは、Rational Systems Developer のインストール・ファイルのみです。このステップの概要については、27 ページの『HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからの Rational Systems Developer のインストール: タスクの概要』および 28 ページの『HTTP Web サーバー上への Rational Systems Developer の配置: タスクの概要』を参照してください。

インストールするフィーチャーの決定

インストールする Rational Systems Developer のフィーチャーを選択することにより、ソフトウェア製品をカスタマイズできます。

IBM Installation Manager を使用して Rational Systems Developer の製品パッケージをインストールする場合は、使用可能な製品パッケージに入っているフィーチャーがインストール・ウィザードに表示されます。このフィーチャー・リストから、インストールするフィーチャーを選択できます。デフォルトの一連のフィーチャーが選択されています (必須フィーチャーはすべて含まれています)。フィーチャー間に依存関係があれば、Installation Manager はそれを強化し、必要なフィーチャーが消去されないようにします。

注: パッケージのインストールを終了した後も、Installation Manager で「パッケージの変更」ウィザードを実行して、ソフトウェア製品のフィーチャーを追加または除去することができます。詳しくは、67 ページの『インストールの変更』を参照してください。

フィーチャー

以下の表には、インストールを選択できる Rational Systems Developer のフィーチャーが示されています。デフォルトで選択されているインストールするフィーチャーは、異なる場合があります。フィーチャーがすでに共用リソース・ディレクトリに存在している場合は、デフォルトでは選択されず、再度インストールされることはありません。

フィーチャー	説明	インストール対象としてデフォルトで選択済み
統一モデリング言語 (UML) モデリング	統一モデリング言語モデル (UML バージョン 2.1) の作成、妥当性検査、および管理をサポートします。このフィーチャーは、UML ベースのパターン、変換、モデル分析、レポート作成など、その他のすべての UML 関連機能の基盤になります。	はい
UML から UML へのパターン実装	パターン実装では、既存のモデル・コンテンツに基づいて新規モデル・コンテンツが自動的に生成されます。20 を超えるパターン実装が含まれているだけでなく、独自のパターン実装を開発するためのツールもサポートされています。	はい

フィーチャー	説明	インストール対象としてデフォルトで選択済み
C++ モデリングと変換	<p>定型の UML 表記を使用することで C++ 実装のダイアグラムを作成し、ビジュアル・コンテキストで C++ 実装を検討および編集することを実現します。C++ 変換により、UML 設計モデルに基づいた C++ コードの生成、および C++ コードからの UML 設計モデルの作成が自動化されます。UML と C++ の混合モデリングおよび調整がサポートされます。</p>	はい
Java モデリングと変換	<p>定型の UML 表記を使用することで Java 実装のダイアグラムを作成し、ビジュアル・コンテキストで Java 実装を検討、編集、およびリファクタリングすることを実現します。Java 変換により、UML 設計モデルに基づいた Java コードの生成、および Java コードからの UML 設計モデルの作成が自動化されます。UML と Java の混合モデリングおよび調整がサポートされます。</p>	いいえ

フィーチャー	説明	インストール対象としてデフォルトで選択済み
UPDM および DoDAF サポート	従来の米国国防総省アーキテクチャー・フレームワーク (Department of Defense Architecture Framework: DoDAF) または DoDAF および英国防省アーキテクチャー・フレームワーク (Defence Architectural Framework: MODAF) 向けの新規の統一モデリング言語 (UML) プロファイルのいずれかを使用して、複雑なシステムのアーキテクチャーを記述することができます。 DoDAF フィーチャーは UML をベースとして使用し、システムの構造をビジュアル、テキスト、および表形式で表現します。 UML Profile for DoDAF and MODAF (UPDM) フィーチャーを利用することで、アーキテクトはシステムとエンタープライズ・アーキテクチャーをモデル化し、モデリング・ツール間のアーキテクチャー・データの相互運用性を向上させ、アーキテクチャー・データの再利用を強化して、DoDAF 利用者と MODAF 利用者間の通信を改善することを実現します。	いいえ
UML から CORBA への変換	UML モデルを基にしたコンポーネント・インターフェース仕様 (CORBA IDL で表記) の生成を自動化します。	はい
WebSphere® Business Modeler 統合	IBM WebSphere Business Modeler のビジネス・プロセス・モデルを、UML 2.1 のモデルとしてレンダリングします。	いいえ

フィーチャー	説明	インストール対象としてデフォルトで選択済み
Rational Data Architect の統合	UML 2 クラス・モデルを、Rational Data Architect でサポートされる論理データ・モデル (LDM) に変換します (Rational Data Architect には、論理データ・モデルを UML クラス・モデルに変換する補助フィーチャーが組み込まれています)。	いいえ
Rational Rose® モデル・インポート	IBM Rational Rose モデルのマイグレーションを行います。これらのモデル内にユーザーの定義したカスタム・プロパティが存在する場合は、これらも含めてマイグレーションされます。	はい
Rational XDE™ モデル・インポート (Windows 用のみ)	IBM Rational XDE モデルのマイグレーションを行います。これらのモデルに対してユーザーが適用したカスタムの UML プロファイルが存在する場合は、これらも含めてマイグレーションされます。	はい
XSLT テンプレートに基づく Web 発行およびレポート作成のモデル化	HTML として UML モデルを発行するフィーチャーと、eXtensible Stylesheet Language Transformation (XSLT) テンプレートに基づいてモデル・レポートを作成するフィーチャーが用意されています。XSLT ベースのレポート作成アプローチは、モデリング製品の初期バージョンに導入されたもので、現在は推奨されていませんが、このテクノロジーを使用してカスタマイズ・レポートを作成したユーザーのために引き続き使用することができます。	いいえ

フィーチャー	説明	インストール対象としてデフォルトで選択済み
BIRT に基づくモデル・レポート作成	ビジネス・インテリジェンスおよびレポート作成ツール (BIRT) に基づいたモデル・レポート作成機能を提供します。これは、レポートを非常に簡単にカスタマイズできる新しい強力なレポート作成機能セットで、各種の出力フォーマットをサポートしています。	いいえ
レポート・データ・セット・オーサリング	上級者がモデル間変換オーサリングのツールと技法を使用して EMF と UML 2 メタモデルのカスタム抽出 (サブセット) を作成することを実現するガイダンスと例を提供します。カスタマイズされたメタデータ・セットを利用して設計者へのレポートを作成することで、設計者は具体的なニーズに合ったシンプルな設計を実現することができます。	いいえ
Rational SoDA [®] 統合 (Windows 用のみ)	IBM Rational SoDA 製品との統合を提供します。モデリング製品の情報を使用して、Microsoft Word 文書を含むレポートや文書を生成します。	いいえ
C および C++ 開発ツール (CDT)	最適化された C または C++ プログラムをビルドおよび実行するためのツールを提供します。C または C++ 統合開発環境 (IDE) で CDT を使用して、コードの編集、Make ファイルの生成、およびアプリケーションのデバッグと起動を行うことができます。	はい
Java クライアント・アプリケーション・エディター (JVE)	グラフィカル・ユーザー・インターフェースを持つ Java クライアント・アプリケーション (SWT、AWT、または Swing UI ライブラリーを使用) をビルドおよびテストするためのツールを提供します。	はい

フィーチャー	説明	インストール対象としてデフォルトで選択済み
コード・レビュー	コードを検査し、各規則やベスト・プラクティスに準拠しているかを調べます。問題の起こりそうな箇所を強調表示し、品質向上のためのコード変更を推奨します。準拠のためのフィックスが、自動的に適用される場合があります。	はい
テストおよびパフォーマンス・ツール・プラットフォーム (TPTP)	アプリケーションのテスト用の Eclipse ツールを提供します。ツール機能にはプロファイル作成、モニター、ログ作成、コンポーネント・テスト (JUnit)、および静的解析またはコード・レビューが含まれます。	はい
アーキテクチャー規則	構造上のパターンとアンチパターンを自動的に検出するツールと、図形による依存関係の可視化を提供します。これによって、Java アプリケーションのアーキテクチャーの整合性が保証されます。	はい
UML モデル分析およびメトリック	UML モデルが規則やベスト・プラクティスに準拠しているかを検査します。モデル分析では、問題の起こりそうな箇所を強調表示し、品質向上のための変更を推奨します。	はい
Rational ClearCase® SCM アダプター	IBM Rational ClearCase SCM および ClearCase MVFS プラグインを提供します。これらを使用すると、ClearCase のバージョン・オブジェクト・ベース (VOB) にソフトウェア成果物の管理バージョンを作成することができます。これらのプラグインは、ClearCase VOB およびビュー・サーバーをインストールする際にも、スナップショット・ビューと動的ビューを使用します。	はい

フィーチャー	説明	インストール対象としてデフォルトで選択済み
Rational RequisitePro® 統合 (Windows 用のみ)	緊密に統合された要件管理ツールを提供します。IBM Rational RequisitePro がインストールされていると、要件とソフトウェア成果物との間で追跡が可能になります。	はい
WebSphere ビジネス・モデルのための Rational RequisitePro との統合 (Windows のみ)	IBM Rational RequisitePro との統合を強化して、モデリング分野全体における要求を把握することができます。 Rational RequisitePro で作成されて、IBM WebSphere ビジネス・モデルのプロセスやその他の要素で実現される要求は、ビジネス・モデルを Rational UML モデリング製品のいずれかで開いたときにも表示することができます。 IT アーキテクトは、ビジネス・ニーズを満たす SOA ソリューションを適切に作成できる一方、関連するすべての要求やプロセスをビジネス・サービス規約として表示できるため、IT 問題にも取り組むことができます。	はい
Rational Unified Process® (RUP®) Process Advisor および Process Browser	ソフトウェア開発と IBM Rational Software Delivery Platform の使用についてのコンテキスト・センシティブ・ガイダンスを提供する Process Advisor、およびユーザーの現在のタスク、成果物、ツールに関するヘルプを提供する Process Browser があります。	はい
変換オーサリング	カスタムの変換を作成したり、既存の変換をカスタマイズしたりするためのツールを提供します。変換により、モデル・コンテンツや実装コードを生成するタスクが自動化されます。	いいえ

フィーチャー	説明	インストール対象としてデフォルトで選択済み
API マイグレーション	<p>ユーザーが作成したプラグインおよびプラグレットのマイグレーションを支援します。</p> <p>Rational UML モデリング製品のバージョン 6 で使用可能な拡張性 API から、バージョン 7.0 で使用可能な API へのマイグレーションです。</p>	いいえ
プラグレット	<p>ワークベンチの拡張に使用できる、小規模な Java アプリケーションを作成するための環境を提供します。プラグレットは、完全な Eclipse プラグインに比べて開発とテストが簡単です。拡張性 API について学習するための良い手段となります。</p>	いいえ
プラグイン開発環境 (PDE)	<p>Eclipse 環境を拡張するために使用できる Eclipse プラグインの作成、開発、テスト、デバッグ、およびデプロイするためのツールを提供します。</p>	いいえ
Eclipse テクノロジー拡張性	<p>Eclipse テクノロジー拡張性機能では、アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)、拡張ポイント、ユーティリティーを組み合わせることで、このワークベンチ・ベース環境の機能を拡張することができます。</p>	いいえ
モデリング拡張性	<p>モデリング拡張性機能では、UML プロファイル、アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)、拡張ポイント、ユーティリティーを組み合わせることで、このワークベンチ・ベース環境のモデリング機能および開発機能を拡張することができます。</p>	いいえ

フィーチャー	説明	インストール対象としてデフォルトで選択済み
Reusable Asset Specification (RAS) 拡張性	RAS 拡張性機能では、アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)、拡張ポイント、ユーティリティーを組み合わせることで、このワークベンチ・ベース環境の RAS 機能を拡張することができます。	いいえ

アップグレード、および共存についての考慮事項

前のバージョンの製品がある場合、または同じワークステーションに複数の Rational Software Delivery Platform 製品をインストールする計画がある場合は、このセクションの情報を検討してください。

製品の共存についての考慮事項

一部の製品は、同じパッケージ・グループにインストールされた場合、それと共存し、機能を共有するように設計されています。パッケージ・グループは、1 つ以上のソフトウェア製品またはパッケージをインストールできるロケーションです。各パッケージをインストールする場合は、そのパッケージを既存のパッケージ・グループにインストールするか、または新規にパッケージ・グループを作成するのかが選択します。IBM Installation Manager は、共有するように設計されていない製品や、バージョンの許容度およびその他の要件を満たさない製品をブロックします。一度に複数の製品をインストールする場合は、製品でパッケージ・グループを共有できなければなりません。

リリース時点で、パッケージ・グループにインストールされた場合に機能を共有する製品は、以下のとおりです。

- Rational Application Developer
- Rational Software Architect
- Rational Functional Tester
- Rational Performance Tester
- Rational Software Modeler
- Rational Systems Developer
- Rational Tester for SOA Quality

適格製品であれば、1 つのパッケージ・グループにいくつでもインストールできます。製品がインストールされると、その機能はパッケージ・グループ内の他のすべての製品で共有されます。開発製品とテスト製品を 1 つのパッケージ・グループにインストールする場合、製品のいずれか一方を始動すると、開発とテストの両方の機能がユーザー・インターフェースで使用可能になります。製品にモデリング・ツールを追加すると、パッケージ・グループ内のすべての製品で、開発、テストおよびモデリングの機能が使用可能になります。

開発製品をインストールし、その後で追加の機能を持つ開発製品を購入して、同じパッケージ・グループにその製品を追加すると、両方の製品で追加の機能が使用可能になります。より多くの機能を持つ製品をアンインストールした場合、元の製品はそのまま残ります。これは、Rational Software Delivery Platform におけるバージョン 6 製品の「アップグレード」の動作とは異なることに注意してください。

注: 固有のロケーションにインストールされた各製品は、1 つのパッケージ・グループとしか関連付けることができません。複数のパッケージ・グループと関連付けるためには、製品を複数のロケーションにインストールする必要があります。Rational Functional Tester および Rational Performance Tester は、コンピューター上の 1 つのロケーション、つまり 1 つのパッケージ・グループにしかインストールできません。

アップグレードに関する考慮事項

バージョン 7.0 より前の Rational Systems Developer は、バージョン 7.0.5 にアップグレードできません。しかし、Rational Systems Developer バージョン 7.0.5 は、以前のバージョンと共存可能です。バージョン 7.0 以上の Rational Systems Developer はバージョン 7.0.5 に更新できます。または、同じコンピューターにバージョン 7.0.5 を別のインスタンスとしてインストールすることもできます。

インストール・リポジトリ

IBM Installation Manager は、指定のリポジトリ・ロケーションから製品パッケージを取得します。

ランチパッドを使用して Installation Manager を開始すると、リポジトリ情報が Installation Manager に渡されます。Installation Manager を直接開始した場合は、インストールする製品パッケージが格納されたインストール・リポジトリを指定する必要があります。『Installation Manager のリポジトリ設定』を参照してください。

一部の組織では、製品パッケージをイントラネットに組み込み、ホスティングします。この種のインストール・シナリオについては、8 ページの『HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからのインストール』を参照してください。システム管理者から正しい URL を提供してもらう必要があります。

デフォルトでは、IBM Installation Manager は、各 Rational ソフトウェア開発製品に組み込まれている URL を使用して、インターネットを介してリポジトリ・サーバーに接続します。その後、Installation Manager が製品パッケージと新規フィーチャーを検索します。

Installation Manager のリポジトリ設定

Rational Systems Developer のインストールをランチパッド・プログラムから開始する場合は、IBM Installation Manager の開始時に、インストールする製品パッケージを含むリポジトリのロケーションが Installation Manager に自動的に定義されます。しかし、直接 Installation Manager を開始する場合 (例えば、Rational Systems Developer を Web サーバー上にあるリポジトリからインストールする場合) は、まず Installation Manager でリポジトリ設定 (製品パッケージが含まれるディレクトリの URL) を指定しておかなければ、製品パッケージはインストールできませ

ん。このリポジトリ・ロケーションは、「設定」ウィンドウの「リポジトリ」ページで指定します。デフォルトでは、IBM Installation Manager は、各 Rational ソフトウェア開発製品に組み込まれている URL を使用して、インターネットを介してリポジトリ・サーバーに接続し、インストール可能なパッケージおよび新規フィーチャーを検索します。組織によっては、イントラネット・サイトを使用するためにリポジトリをリダイレクトする必要があります。

注: インストール・プロセスを開始する前に、必ず管理者からインストール・パッケージのリポジトリの URL を取得してください。

Installation Manager でリポジトリ・ロケーションを追加、編集、または除去するには、以下のようにします。

1. Installation Manager を開始します。
2. Installation Manager の「始動」ページで、「ファイル」→「設定」をクリックしてから「リポジトリ」をクリックします。「リポジトリ」ページが開きます。このページには、使用可能なリポジトリ、そのロケーション、およびアクセス可能かどうかが表示されます。
3. 「リポジトリ」ページで、「リポジトリの追加」をクリックします。
4. 「リポジトリの追加」ウィンドウで、リポジトリ・ロケーションの URL を入力するか、ブラウザしてファイル・パスを設定します。
5. 「OK」をクリックします。HTTPS または制限付き FTP のリポジトリ・ロケーションを指定した場合は、ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。新規または変更されたリポジトリ・ロケーションがリストされます。リポジトリがアクセス不可の場合は、「接続」列に赤い x が表示されます。
6. 「OK」をクリックして終了します。

注: Installation Manager によってデフォルトのリポジトリ・ロケーションでインストール済みパッケージを検索する場合は、「リポジトリ」の設定ページで「インストールと更新を行っている間にサービス・リポジトリを検索します」の設定が選択されていることを確認します。この設定はデフォルトで選択されています。

パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリー

IBM Installation Manager を使用して Rational Systems Developer パッケージをインストールする場合は、パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリーを選択する必要があります。

パッケージ・グループ

インストール・プロセス中に、Rational Systems Developer パッケージのパッケージ・グループを指定する必要があります。パッケージ・グループは、パッケージが同じグループ内の他のパッケージとリソースを共用するディレクトリーを表します。Installation Manager を使用して Rational Systems Developer パッケージをインストールする場合は、新規パッケージ・グループを作成するか、またはパッケージを既存のパッケージ・グループにインストールできます。(一部のパッケージは、

パッケージ・グループを共用できない場合があります。その場合、既存パッケージ・グループを使用するオプションが使用不可になります。)

一度に複数のパッケージをインストールする場合は、すべてのパッケージが同じパッケージ・グループにインストールされる点に注意してください。

パッケージ・グループには自動的に名前が割り当てられます。ただし、パッケージ・グループのインストール・ディレクトリーは選択できます。

製品パッケージのインストールが成功し、パッケージ・グループが作成された後に、インストール・ディレクトリーを変更することはできません。インストール・ディレクトリーには、パッケージ・グループにインストールされた Rational Systems Developer 製品パッケージに固有のファイルおよびリソースが含まれます。他のパッケージに使用される可能性のある製品パッケージ内のリソースは、共用リソース・ディレクトリーに置かれます。

重要: 管理者特権を持たないユーザーが Rational Systems Developer を Windows Vista オペレーティング・システムで作業するには、Program Files ディレクトリー (C:\Program Files) 内のディレクトリーを選択しないでください。

共用リソース・ディレクトリー

共用リソース・ディレクトリー は、1 つ以上の製品パッケージ・グループで使用できるインストール作成物を配置するディレクトリーです。

重要:

- 共用リソース・ディレクトリーは、パッケージの初回インストール時に指定できます。最良の結果を得るには、一番大きいドライブを使用してください。すべてのパッケージをアンインストールするまで、ディレクトリー・ロケーションを変更することはできません。
- 管理者特権を持たないユーザーが Rational Systems Developer を Windows Vista システム上で作業するには、Program Files ディレクトリー (C:\Program Files) 内のディレクトリーを選択しないでください。

既存の Eclipse IDE の拡張

Rational Systems Developer 製品パッケージをインストールする際に、コンピューターにすでにインストール済みの Eclipse 統合開発環境 (IDE) を拡張することを選択することができます。拡張は、Rational Systems Developer パッケージに含まれている機能を追加することによって実現できます。

IBM Installation Manager を使用してインストールされた Rational Systems Developer パッケージは、あるバージョンの Eclipse IDE、つまりワークベンチが組み込まれています。この組み込まれたワークベンチは、Installation Manager パッケージの機能を提供する際の基本プラットフォームになります。ただし、ワークステーション上に既存の Eclipse IDE がある場合は、この IDE を拡張 するかどうかを選択可能です。つまり、Rational Systems Developer パッケージで提供される追加機能を、IDE に追加するかどうかを選択できるわけです。

既存の Eclipse IDE を拡張するには、「パッケージのインストール」ウィザードの「ロケーション」ページで、「既存の Eclipse IDE の拡張 (Extend an existing Eclipse IDE)」オプションを選択します。

重要: 管理者特権を持たないユーザーが Rational Systems Developer を Windows Vista オペレーティング・システムで作業するには、Program Files ディレクトリ (C:\Program Files) 内に Eclipse をインストールしないでください。

既存の Eclipse IDE を拡張するのは、例えば、Rational Systems Developer パッケージで提供されている機能はほしいが、Rational Systems Developer パッケージが提供する機能で作業する場合に、現行 IDE の設定も保持したい場合です。すでに Eclipse IDE を拡張しているインストール済みのプラグインを使用して、作業をしたいという場合もあります。

既存の Eclipse IDE の拡張は、eclipse.org から提供される最新の更新が適用されたバージョン 3.3.1 でのみ可能です。Installation Manager は、指定した Eclipse インスタンスがインストール・パッケージの要件を満たしているか検査します。

注: 更新を Rational Systems Developer にインストールするには、Eclipse バージョンの更新が必要な場合があります。前提となる Eclipse バージョンへの変更については、更新情報のリリース文書を参照してください。

プリインストール・タスク

製品をインストールする前に、以下のステップを実行しておく必要があります。

1. ご使用のシステムがセクション 3 ページの『インストール要件』に記載されている要件を満たしていることを確認します。
2. ご使用のユーザー ID が製品のインストールに必要なアクセス権を満たしていることを確認します。6 ページの『ユーザー特権についての要件』を参照してください。
3. セクション 7 ページの『インストール計画』を一読します。特に、トピック 17 ページの『アップグレード、および共存についての考慮事項』をよくお読みください。
4. Linux の場合: root 以外のユーザーも製品を使用できるようにしたい場合は、**製品をインストールする前に**、umask 変数を 0022 に設定する必要があります。この変数を設定するには、root ユーザーとしてログインして端末セッションを開始し、umask 0022 と入力してください。

インストール作業

次のセクションでは、7 ページの『インストール・シナリオ』のセクションに記載されているインストール・シナリオの概要を示します。詳しい説明には、メイン・ステップのリンクからアクセスできます。

Rational Systems Developer の CD-ROM からのインストール: タスクの概要

このインストール・シナリオでは、インストール・ファイルが含まれている CD を持っており、通常は、そこからワークステーション上に Rational Systems Developer をインストールします。

CD からインストールする一般的な手順は、次のとおりです。

1. 23 ページの『プリインストール・タスク』 にリストされているプリインストールのステップをすべて実行します。
2. 1 枚目のインストール CD を CD ドライブに挿入します。
3. Linux の場合: CD ドライブをマウントします。
4. システムで自動実行が使用可能になっている場合は、Rational Systems Developer ランチパッド・プログラムが自動的に開きます。自動実行が使用不可の場合は、ランチパッド・プログラムを開始してください。詳しくは、38 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
5. ランチパッドから Rational Systems Developer のインストールを開始します。詳しくは、38 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。

IBM Installation Manager がワークステーション上で検出されない場合、先に進むためには Installation Manager をインストールする必要があります。ウィザードの指示に従って、Installation Manager のインストールを完了します。詳しくは、31 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。

Installation Manager のインストールが完了したら、あるいは、すでにコンピューター上にある場合は、Installation Manager が自動的に開始します。

6. 「パッケージのインストール」をクリックし、「パッケージのインストール」ウィザードの指示に従って、インストールを完了します。詳しくは、39 ページの『Installation Manager GUI の使用による Rational Systems Developer のインストール』を参照してください。
7. ライセンスを構成します。デフォルトで、Rational Systems Developer のトライアル・ライセンスが含まれています。引き続き製品にアクセスできるように、ライセンスを構成する必要があります。詳しくは、57 ページの『ライセンスの管理』を参照してください。

8. Linux の場合: ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やします。詳しくは、63 ページの『Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす』を参照してください。
9. Rational Systems Developer と一緒に組み込まれているオプション・ソフトウェアをインストールします。

ワークステーション上の電子イメージからの Rational Systems Developer のインストール: タスクの概要

電子インストール・イメージから Rational Systems Developer をインストールする場合の一般的な手順は、次のとおりです。

1. IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードする必要があるファイルと抽出したインストール・イメージの両方を保管するのに十分なスペースが、ワークステーションにあることを確認してください。3 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. IBM パスポート・アドバンテージから製品イメージの必要な部分を、一時ディレクトリーにすべてダウンロードします。
3. ダウンロードしたファイルからインストール・イメージを抽出し、インストール・イメージが完全であることを確認します。詳しくは、35 ページの『電子イメージの確認および解凍』を参照してください。
4. 続けて、下記の『電子イメージからのインストール』のステップを実行します。

電子イメージからのインストール

1. 23 ページの『プリインストール・タスク』にリストされているプリインストールのステップをすべて実行します。
2. ランチパッド・プログラムを開始します。詳しくは、38 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
3. ランチパッドから Rational Systems Developer のインストールを開始します。詳しくは、38 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。

IBM Installation Manager がワークステーション上で検出されない場合、先に進むためには Installation Manager をインストールする必要があります。ウィザードの指示に従って、Installation Manager のインストールを完了します。詳しくは、31 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。

Installation Manager のインストールが完了したら、あるいは、すでにシステム上にある場合は、Installation Manager が自動的に開始します。

注: 製品インストールが完了する前に Installation Manager を終了した場合、ランチパッドから Installation Manager を再起動する必要があります。
Installation Manager を直接開始した場合は、必要なインストール・リポジトリによる事前設定は行われません。

4. 「パッケージのインストール」ウィザードの説明に従って、インストールを完了します。詳しくは、39 ページの『Installation Manager GUI の使用による Rational Systems Developer のインストール』を参照してください。
5. ライセンスを構成します。デフォルトで、Rational Systems Developer のトライアル・ライセンスが含まれています。引き続き製品にアクセスできるように、ライセンスを構成する必要があります。詳しくは、57 ページの『ライセンスの管理』を参照してください。
6. Linux の場合: ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やします。詳しくは、63 ページの『Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす』を参照してください。
7. Rational Systems Developer と一緒に組み込まれているオプション・ソフトウェアをインストールします。

共用ドライブ上の電子イメージからの Rational Systems Developer のインストール: タスクの概要

このシナリオでは、お客様は共用ドライブ上に電子イメージを置いて、社内のユーザーが 1 つのロケーションから Rational Systems Developer のインストール・ファイルにアクセスできるようにします。

共用ドライブ上にインストール・イメージを置く人が、以下のステップを実行します。

1. IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードする必要があるファイルと抽出したインストール・イメージの両方を保管するのに十分なディスク・スペースが、共用ドライブにあることを確認してください。詳しくは、3 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. IBM パスポート・アドバンテージから製品イメージの必要な部分を、共用ドライブ上の一時ディレクトリーにすべてダウンロードします。
3. インストール・イメージをダウンロードしたファイルから共用ドライブ上のアクセス可能なディレクトリーに抽出し、インストール・イメージが完全であることを確認します。詳しくは、35 ページの『電子イメージの確認および解凍』を参照してください。

共用ドライブ上のインストール・ファイルから Rational Systems Developer をインストールするには、以下のようにします。

1. インストール・イメージが含まれている共用ドライブの disk1 ディレクトリーに移動します。
2. 26 ページの『電子イメージからのインストール』のステップに従います。

HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリーからの Rational Systems Developer のインストール: タスクの概要

このシナリオでは、製品パッケージは HTTP または HTTPS Web サーバーから IBM Installation Manager によって取り出されます。

以下のステップは、Rational Systems Developer パッケージを含むリポジトリーが HTTP または HTTPS Web サーバー上に作成されていることを前提としています。

Rational Systems Developer パッケージを HTTP または HTTPS サーバー上のリポジトリからインストールするには、以下のようになります。

1. 23 ページの『プリインストール・タスク』 にリストされているプリインストールのステップをすべて実行します。
2. IBM Installation Manager をインストールします。31 ページの『IBM Installation Manager の管理』を参照してください。このシナリオでは、例えば Installation Manager のインストール・ファイルは共用ドライブから入手できます。
3. 「Installation Manager」を開始する。詳しくは、32 ページの『Windows での Installation Manager の開始』を参照してください。
4. Rational Systems Developer パッケージが含まれているリポジトリの URL を、Installation Manager のリポジトリとして設定します。18 ページの『Installation Manager のリポジトリ設定』を参照してください。
5. Installation Manager で「パッケージのインストール」ウィザードを開始し、「パッケージのインストール」ウィザードのスクリーン内の指示に従って、インストールを完了します。詳しくは、39 ページの『Installation Manager GUI の使用による Rational Systems Developer のインストール』を参照してください。
6. ライセンスを構成します。デフォルトで、Rational Systems Developer のトライアル・ライセンスが含まれています。ライセンスを設定して、引き続きアクセスして製品で作業ができることを確認してください。詳しくは、57 ページの『ライセンスの管理』を参照してください。
7. Linux の場合: ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やします。詳しくは、63 ページの『Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす』を参照してください。
8. Rational Systems Developer と一緒に組み込まれているオプションのソフトウェアをインストールします。

HTTP Web サーバー上への Rational Systems Developer の配置: タスクの概要

HTTP Web サーバー上にあるリポジトリから、インストールのために Rational Systems Developer を準備するには、次のようになります。

1. ご使用の HTTP または HTTPS Web サーバーに、製品パッケージを保管するのに十分なディスク・スペースがあることを確認します。3 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードする必要のあるファイルと抽出したインストール・イメージの両方を保管するのに十分なディスク・スペースが、ワークステーションにあることを確認してください。3 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
3. IBM パスポート・アドバンテージから製品イメージの必要な部分を、ワークステーション上の一時ディレクトリにすべてダウンロードします。
4. ダウンロードしたファイルからインストール・イメージをワークステーション上の別の一時ディレクトリに抽出し、インストール・イメージが完全であることを確認します。詳しくは、35 ページの『電子イメージの確認および解凍』を参照してください。

5. ご使用のプラットフォームに適切な Enterprise Deployment CD (または電子ディスク) から、ワークステーションに IBM Packaging Utility をインストールします。
6. Packaging Utility を使用して、Rational Systems Developer 製品パッケージをコピーします。
7. Packaging Utility の出力を HTTP または HTTPS Web サーバーにコピーします。
8. IBM Installation Manager のインストール・ファイルを Enterprise Deployment CD から共用ドライブにコピーします。
9. 社内ユーザーに Installation Manager をインストールするよう指示します。
10. 以前に作成済みの Rational Systems Developer 製品パッケージが含まれているリポジトリの URL をユーザーに提供します。

IBM Installation Manager の管理

このセクションでは、IBM Installation Manager に関連したいくつかの共通タスクを扱います。詳しくは、Installation Manager のオンライン・ヘルプ、または Installation Manager のインフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1m0r0/index.jsp>) を参照してください。

Windows への Installation Manager のインストール

ランチパッド・プログラムから製品のインストールを開始する場合、IBM Installation Manager がまだワークステーションにインストールされていないときには、そのインストールが自動的に開始されます。(このプロセスについて詳しくは、37 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストール』を参照してください。) それ以外の場合には、Installation Manager のインストールを手動で開始する必要があります。

Installation Manager のインストールを手動で開始するには、次のようにします。

- 1 枚目のインストール・ディスクの `InstallerImage_win32` フォルダーから、`install.exe` を実行します。
- 「パッケージのインストール」ページで「次へ」をクリックします。
- 「ご使用条件」ページの使用条件を読み、「使用条件の条項に同意します」を選択して同意します。「次へ」をクリックします。
- 必要に応じて、「宛先フォルダー」ページの「参照」ボタンをクリックして、インストール・ロケーションを変更します。「次へ」をクリックします。
- 要約ページで「インストール」をクリックします。インストール・プロセスが完了したら、プロセスが正常に行われたことを確認するメッセージが表示されません。
- 「終了」をクリックします。IBM Installation Manager が開きます。

Linux への Installation Manager のインストール

IBM Installation Manager は、ランチパッドによってインストールされます。このプロセスについて詳しくは、37 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストール』を参照してください。

Installation Manager を手動でインストールするには、以下のようになります。

1. root ユーザー特権でターミナル・ウィンドウを開きます。
2. 1 枚目のインストール・ディスクの `InstallerImager_linux` フォルダーから、`install` を実行します。
3. 「パッケージのインストール」画面で「次へ」をクリックします。
4. 「ご使用条件」ページの使用条件を読み、「使用条件の条項に同意します」を選択して同意します。「次へ」をクリックします。

5. 必要に応じてインストール・ディレクトリー・ロケーションを編集します。「次へ」をクリックします。
6. 情報の要約ページで「インストール」をクリックします。インストール・プロセスが完了したら、プロセスが正常に行われたことを確認するメッセージが表示されます。
7. 「終了」をクリックします。IBM Installation Manager が開きます。

Windows での Installation Manager の開始

IBM Installation Manager は、ランチパッド・プログラムから開始してください。こうすると、Installation Manager が、リポジトリー設定を構成し、Rational Systems Developer パッケージを選択した状態で起動します。Installation Manager を直接開始した場合は、リポジトリーの設定と製品パッケージの選択を手動で行う必要があります。詳しくは、7 ページの『インストール計画』を参照してください。

Installation Manager を手動で開始するには、以下のようにします。

1. タスク バーの「スタート」メニューを開きます。
2. 「すべてのプログラム」 → 「IBM Installation Manager」 → 「IBM Installation Manager」を選択します。

注: Windows Vista オペレーティング・システムでは、Installation Manager を管理者として実行しなければなりません。プログラムのショートカットを右クリックして、「管理者として実行」をクリックします。

Linux での Installation Manager の開始

IBM Installation Manager は、ランチパッド・プログラムから開始してください。こうすると、Installation Manager が、リポジトリー設定を構成し、Rational Systems Developer パッケージを選択した状態で起動します。Installation Manager を直接開始する場合は、リポジトリーの設定と製品パッケージの選択を手動で行う必要があります。詳しくは、7 ページの『インストール計画』を参照してください。

Installation Manager を手動で開始するには、以下のようにします。

1. root ユーザー特権でターミナル・ウィンドウを開きます。
2. ディレクトリーを Installation Manager のインストール・ディレクトリー (デフォルトでは /opt/IBM/InstallationManager/eclipse) に変更し、IBMIM を実行します。

Windows での Installation Manager のアンインストール

Installation Manager をアンインストールするには、以下のようにします。

1. タスク バーの「スタート」メニューを開きます。
2. 「すべてのプログラム」 → 「IBM Installation Manager」 → 「IBM Installation Manager のアンインストール」を選択します。
3. 「アンインストール」ページで「次へ」をクリックします。アンインストール対象として IBM Installation Manager が選択されます。

4. 要約ページで「アンインストール」をクリックします。

注: Installation Manager のアンインストールは、「コントロール パネル」を使用して行うこともできます。「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」の順にクリックし、「プログラムの追加と削除」をダブルクリックします。IBM Installation Manager の項目を選択し、「削除」をクリックします。

Linux での Installation Manager のアンインストール

IBM Installation Manager のアンインストールには、Linux バージョンに組み込まれているパッケージ管理ツールを使用する必要があります。

Linux から Installation Manager を手動でアンインストールするには、以下のようになります。

1. root ユーザー特権でターミナル・ウィンドウを開きます。
2. ディレクトリーを、Installation Manager のアンインストール・ディレクトリーに変更します。デフォルトでは、これは `/var/ibm/InstallationManager/uninstall` です。
3. `./uninstall` を実行します。

Installation Manager のサイレント・インストールとアンインストール

IBM Installation Manager はサイレントでインストールおよびアンインストールすることができます。

Installation Manager のサイレント・インストール

Installation Manager のサイレント・インストールを実行するには、インストーラーを `unzip` し、`InstallerImage_platform` サブディレクトリーに切り替えて、次のコマンドを使用します。

- Windows の場合: `installc --launcher.ini silent-install.ini -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例: `installc --launcher.ini silent-install.ini -log c:\mylogfile.xml`
- その他のプラットフォームの場合: `install --launcher.ini silent-install.ini -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例: `install --launcher.ini silent-install.ini -log /root/mylogs/mylogfile.xml`

インストールしたら、Installation Manager または Installation Manager インストーラーを使用してパッケージのサイレント・インストールを実行することができます。

Windows からの Installation Manager のサイレント・アンインストール

Windows で Installation Manager をサイレントでアンインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. コマンド行から、Installation Manager の `uninstall` ディレクトリーに移動します。デフォルトでは、これは `C:\Documents and Settings\%All Users%\Application Data\IBM\Installation Manager\uninstall` です。

2. コマンド `uninstallc.exe --launcher.ini silent-uninstall.ini` を入力します。

その他のプラットフォームでの Installation Manager のサイレント・アンインストール

その他のプラットフォームで Installation Manager をサイレントでアンインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. 端末ウィンドウから、ディレクトリーを Installation Manager の `uninstall` ディレクトリーに変更します。デフォルトでは、これは `/var/ibm/InstallationManager/uninstall` です。
2. コマンド `uninstall --launcher.ini silent-uninstall.ini` を実行します。

電子イメージの確認および解凍

インストール・ファイルを IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードする場合は、圧縮ファイルから電子イメージを解凍してから、Rational Systems Developer をインストールしてください。

インストール・ファイルのダウンロードに Download Director オプションを選択した場合、Download Director アプレットは処理する各ファイルの完全性を自動的に検証します。

ダウンロードしたファイルの解凍

圧縮ファイルは、それぞれ同じディレクトリーに解凍します。Linux の場合: ディレクトリー名にスペースを使用しないでください。スペースを使用すると、コマンド行からランチパッドを開始するための `launchpad.sh` コマンドを実行できなくなります。

ランチパッド・プログラムからのインストール

ランチパッド・プログラムを使用すると、1つのロケーションでリリース情報の表示およびインストール・プロセスの開始を行うことができます。

次の場合は、ランチパッド・プログラムを使用して、Rational Systems Developer のインストールを開始します。

- 製品 CD からのインストール
- ローカル・ファイル・システムの電子イメージからのインストール
- 共有ドライブ上の電子イメージからのインストール

インストール・プロセスをランチパッド・プログラムから開始すると、コンピューターにまだインストールされていない場合には、IBM Installation Manager が自動的にインストールされ、Rational Systems Developer パッケージが含まれているリポジトリのロケーションで事前定義された状態で起動します。Installation Manager を直接インストールして開始する場合は、手動でリポジトリ設定を行う必要があります。

ランチパッドからインストールするには、以下のようにします。

1. プリインストール・タスクをまだ行っていない場合は、23ページの『プリインストール・タスク』に記載されているプリインストール・タスクを完了します。
2. ランチパッド・プログラムを開始します。38ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
3. Rational Systems Developer のインストールを開始します。38ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。

「パッケージのインストール」ウィザードの説明に従って、インストールを完了します。詳しくは、39ページの『Installation Manager GUI の使用による Rational Systems Developer のインストール』を参照してください。

重要: Windows Vista オペレーション・システムでのインストール上の注意:

- ランチパッド・プログラムは管理者として実行する必要があります。
- ランチパッド・プログラムから Rational Systems Developer のインストールを開始する場合は、管理者としてランチパッド・プログラムを実行する必要があります。ランチパッド・プログラムが自動的に開始する (例えば、CD からインストールしている) 場合は、ランチパッド・プログラムを停止し、「管理者として実行」コマンドを使用して再始動します (CD またはディスク・イメージのルート・レベルで、launchpad.exe を右クリックして、「管理者として実行」をクリックします)。
- Program Files ディレクトリー (C:\Program Files) 内でインストール・ディレクトリーを選択することは推奨されません。Program Files ディレクトリー内でインストール・ロケーションまたは共有リソース・ディレクトリーのいずれかを選択した場合は、インストールするパッケージを管理者として実行する必要があります。

ランチパッド・プログラムの開始

プリインストール・タスクをまだ行っていない場合は、23 ページの『プリインストール・タスク』に記載されているプリインストール・タスクを完了します。

CD からインストールする場合に、ワークステーション上で自動実行が使用可能になっているときは、1 枚目のインストール・ディスクを CD ドライブに挿入すると、Rational Systems Developer ランチパッドが自動的に開始します。電子イメージからインストールする場合、もしくは、ワークステーション上で自動実行が未構成な場合は、ランチパッド・プログラムを手動で開始する必要があります。

ランチパッド・プログラムを開始するには、以下のようにします。

1. IBM Rational Systems Developer CD を CD ドライブに挿入します。Linux の場合: CD ドライブがマウントされていることを確認します。
2. システムで自動実行が使用可能になっている場合は、IBM Rational Systems Developer ランチパッド・プログラムが自動的に開きます。システムで自動実行が使用不可の場合は、以下のようにします。
 - Windows の場合: CD のルート・ディレクトリーにある `launchpad.exe` を実行します。
 - Linux の場合: CD のルート・ディレクトリーにある `launchpad.sh` を実行します。

ランチパッド・プログラムからのインストールの開始

1. ランチパッド・プログラムを開始します。
2. リリース情報をまだ読んでいない場合は、「リリース・ノート (Release notes)」をクリックしてお読みください。
3. インストールの開始準備ができたなら、「IBM Rational Systems Developer のインストール」をクリックします。
4. IBM Installation Manager がシステム上で検出されない場合、または古いバージョンがすでにインストールされている場合は、最新リリースのインストールを続行する必要があります。
5. ウィザードの指示に従って、IBM Installation Manager のインストールを完了します。詳しくは、31 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。
6. IBM Installation Manager のインストールが正常に完了したら、「終了」をクリックしてウィザードを閉じます。インストールが完了すると、IBM Installation Manager が自動的に開きます。
7. これが新規インストールの場合は、「パッケージのインストール」をクリックし、ウィザードの指示に従ってインストール・プロセスを完了します。詳しくは、39 ページの『Installation Manager GUI の使用による Rational Systems Developer のインストール』を参照してください。
8. 製品更新の場合は、「パッケージの更新」をクリックし、ウィザードの指示に従って更新プロセスを完了します。詳しくは、69 ページの『Rational Systems Developer の更新』を参照してください。

Installation Manager GUI の使用による Rational Systems Developer のインストール

以下のステップでは、IBM Rational Systems Developer パッケージの Installation Manager グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) によるインストールについて説明します。

1. Installation Manager の「スタート」ページで、「パッケージのインストール」をクリックします。

注: Installation Manager の新しいバージョンが検出されると、そのバージョンのインストールの確認を求めるプロンプトが表示されます。これを確認しないと、続行することはできません。「OK」をクリックして先に進みます。Installation Manager は自動的に、新しいバージョンのインストール、停止、再始動、および再開を実行します。

2. 「パッケージのインストール」ウィザードの「インストール」ページに、Installation Manager が検索したリポジトリ内で検出されたすべてのパッケージがリストされます。2 つのバージョンのパッケージが検出された場合は、最新バージョンまたは推奨バージョンのパッケージのみが表示されます。

- Installation Manager で検出されたすべてのバージョンのパッケージを表示するには、「すべてのバージョンを表示」をクリックします。
- 推奨パッケージのみの表示に戻すには、「推奨のみを表示」をクリックします。

3. IBM Rational Systems Developer パッケージをクリックすると、「詳細」ペインにその説明が表示されます。

4. IBM Rational Systems Developer パッケージに対する更新を検索するには、「その他のバージョンおよび拡張の検査 (Check for Other Versions and Extensions)」をクリックします。

注: Installation Manager が定義済みの IBM 更新リポジトリ・ロケーションでインストール済みパッケージを検索するには、「リポジトリ」の設定ページで「インストールと更新を行っている間にリンクされたリポジトリをサーチします」設定を選択する必要があります。この設定はデフォルトで選択されています。インターネットへのアクセスも必要です。

Installation Manager は、製品パッケージの定義済みの IBM 更新リポジトリで更新を検索します。リポジトリ・ロケーションを設定しておけば、そこも検索します。プログレス・バーに検索状況が表示されます。基本製品パッケージのインストールと同時に更新もインストールできます。

5. IBM Rational Systems Developer パッケージの更新が検出されると、「パッケージのインストール」ページの各製品の下に「インストール・パッケージ」リストにそれらが表示されます。デフォルトでは、推奨される更新のみが表示されます。

- 使用可能なパッケージ用に検出された更新をすべて表示するには、「すべてのバージョンを表示」をクリックします。

- 「詳細」でパッケージの説明を表示するには、パッケージ名をクリックします。README ファイルやリリース・ノートなど、パッケージに関する追加情報が入手可能な場合は、説明本文の最後に「詳細情報」リンクが表示されます。このリンクをクリックすると、ブラウザに追加情報が表示されます。インストールするパッケージを完全に理解するためには、事前にすべての情報を検討しておくようにしてください。
- 6. インストールする IBM Rational Systems Developer パッケージおよびそのパッケージに対する更新を選択します。依存関係のある更新は、自動でまとめて選択およびクリアされます。「次へ」をクリックして続けます。

注: 一度に複数のパッケージをインストールする場合は、すべてのパッケージが同じパッケージ・グループにインストールされます。

- 7. 「ライセンス」ページで、選択したパッケージのご使用条件を読みます。

複数のパッケージをインストールするよう選択した場合は、パッケージごとにご使用条件があります。「ライセンス」ページの左側で、各パッケージのバージョンをクリックして、ご使用条件を表示してください。インストールするために選択したパッケージのバージョン (例えば、基本パッケージおよび更新) は、パッケージ名の下にリストされます。

- a. ご使用条件のすべての条項に同意する場合は、「使用条件の条項に同意します」をクリックします。
 - b. 「次へ」をクリックして続けます。
- 8. 「ロケーション」ページで、「共用リソース・ディレクトリー」フィールドに共用リソース・ディレクトリーのパスを入力するか、デフォルト・パスを受け入れます。(Linux でインストールしている場合、ディレクトリー・パスにスペースを使用していないことを確認してください。) 共用リソース・ディレクトリーには、1 つ以上のパッケージ・グループが共用できるリソースが含まれています。「次へ」をクリックして続けます。

デフォルト・パスは次のとおりです:

- Windows の場合: C:\Program Files\IBM\SDP70Shared
- Linux の場合: /opt/IBM/SDP70Shared

重要: 共用リソース・ディレクトリーは、パッケージの初回インストール時のみ指定できます。将来のパッケージの共用リソースに十分なスペースを確保するために、これには一番大きいディスクを使用してください。すべてのパッケージをアンインストールするまで、ディレクトリー・ロケーションを変更することはできません。

- 9. 「ロケーション」ページで、IBM Rational Systems Developer パッケージのインストール先のパッケージ・グループを作成します。または、これが更新の場合は、既存のパッケージ・グループを使用します。パッケージ・グループは、パッケージが同じグループ内の他のパッケージとリソースを共用するディレクトリーを表します。新しいパッケージ・グループを作成するには、以下のようになります。
- a. 「新規パッケージ・グループの作成 (Create a new package group)」をクリックします。

- b. パッケージ・グループのインストール・ディレクトリーのパスを入力します。(Linux でインストールしている場合、ディレクトリー・パスにスペースを使用していないことを確認してください。) パッケージ・グループの名前が自動的に作成されます。

デフォルト・パスは次のとおりです:

- Windows の場合: C:\Program Files\IBM\SDP70
- Linux の場合: /opt/IBM/SDP70

重要: Windows Vista では、 Program Files ディレクトリーは、管理者以外のユーザーがこの保護下のディレクトリーへの書き込み権限を持つことができるように、常に仮想化されます。ただし、仮想化の解決策は、Rational Systems Developer には対応していません。

パス C:\Program Files 内でインストール・ロケーションまたは共用リソース・ディレクトリーを選択したときに、管理者として Rational Systems Developer を実行する必要がある場合は、次の手順のいずれかに従ってください。

- パス C:\Program Files 内のディレクトリーでインストール・ロケーションを選択した場合は、Rational Systems Developer (および同じインストール・ロケーションを共有している他のプログラム) を再インストールして、パス C:\Program Files 以外のインストール・ロケーションを選択します。
- パス C:\Program Files 内の共用リソース・ディレクトリーを選択した場合は、Rational Systems Developer およびすべての Rational Software Delivery Platform 製品パッケージを (そのインストール・ロケーションに関係なく) 再インストールし、パス C:\Program Files 以外の共用リソース・ディレクトリーおよびインストール・ロケーションを選択します。

- c. 「次へ」をクリックして続けます。

10. 次の「ロケーション」ページで、インストールするパッケージに機能を追加して、システムにすでにインストールされている既存の Eclipse IDE を拡張することができます。このオプションを選択するには、eclipse.org から提供される最新の更新が適用された Eclipse バージョン 3.2.1 を使用している必要があります。

- 既存の Eclipse IDE を拡張しない場合は、「次へ」をクリックして続けます。
- 既存の Eclipse IDE を拡張するには、以下のようにします。
 - a. 「既存の Eclipse を拡張 (Extend an existing Eclipse)」を選択します。
 - b. 「Eclipse IDE」フィールドに eclipse 実行可能ファイル (eclipse.exe または eclipse.bin) が含まれているフォルダーのロケーションを入力するか、またはナビゲートします。Installation Manager は、Eclipse IDE のバージョンが、インストールするパッケージに有効であるかどうか検査します。「Eclipse IDE JVM」フィールドに、指定した IDE の Java 仮想マシン (JVM) が表示されます。
 - c. 「次へ」をクリックして続けます。

11. 「フィーチャー」ページの「言語」で、パッケージ・グループの言語を選択します。IBM Rational Systems Developer パッケージのユーザー・インターフェースおよびドキュメンテーションについて、対応する各国語翻訳がインストールされます。
12. IBM Rational Systems Developer パッケージをインストールする前に「要約」ページで選択項目を検討します。前のページで行った選択を変更したい場合は、「戻る」をクリックして変更を行います。選択がそのままであれば、「インストール」をクリックしてパッケージをインストールします。プログレス・バーにインストールの完了パーセントが表示されます。
13. インストール・プロセスが完了したら、プロセスが正常に行われたことを確認するメッセージが表示されます。
 - a. 「ログ・ファイルの表示」をクリックして、新規ウィンドウで現行セッションのインストール・ログ・ファイルを開きます。続行するには、「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
 - b. 「パッケージのインストール」ウィザードで、終了時に IBM Rational Systems Developer を開始するかどうかを選択します。
 - c. 「終了」をクリックして、選択したパッケージを起動します。「パッケージのインストール」ウィザードが閉じ、Installation Manager の「始動」ページに戻ります。

サイレント・インストール

Rational Systems Developer 製品パッケージは、Installation Manager をサイレント・インストール・モードを実行してインストールできます。Installation Manager をサイレント・モードで実行する場合は、ユーザー・インターフェースは使用できません。代わりに、Installation Manager は応答ファイルを使用して、製品パッケージのインストールに必要なコマンドを入力します。Installation Manager のインストールも、Installation Manager インストーラーを使用してサイレントで実行することができます。これで、インストーラーを使用して製品パッケージのインストールをサイレントで実行できるようになります。

Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、バッチ処理でスクリプトを通じて製品パッケージのインストール、更新、変更、およびアンインストールを行えるため便利です。

Rational Systems Developer パッケージをサイレント・インストールする前に、Installation Manager をインストールする必要があることに注意してください。Installation Manager のインストールについて詳しくは、31 ページの『IBM Installation Manager の管理』を参照してください。

サイレント・インストールには、必須のメインタスクが 2 つあります。

1. 応答ファイルの作成。
2. Installation Manager のサイレント・インストール・モードでの実行。

Installation Manager による応答ファイルの作成

Installation Manager または Installation Manager インストーラーで Rational Systems Developer 製品パッケージをインストールするときのアクションを記録して、応答ファイルを作成することができます。応答ファイルを記録すると、Installation Manager の GUI で選択した項目がすべて XML ファイルに保管されます。Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、Installation Manager は XML 応答ファイルを使用して、パッケージが含まれているリポジトリの検索、インストールするフィーチャーの選択などを行います。

インストール (またはアンインストール) 用の応答ファイルを記録するには、以下のようになります。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリーの eclipse サブディレクトリーに移動します。例:
 - Windows の場合: `cd C:\Program Files\IBM\Installation Manager\eclipse`
 - その他のプラットフォームの場合: `cd /opt/IBM/InstallationManager/eclipse`
2. コマンド行で次のコマンドを入力して、Installation Manager を開始し、応答ファイルおよび (オプションで) ログ・ファイルのファイル名およびロケーションについては独自のものに置換します。

- IBMIM -record <応答ファイルのパスおよび名前> -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>。例: IBMIM.exe -record c:\mylog\responsefile.xml -log c:\mylog\record_log.xml
- 応答ファイルを記録するには、オプションの `-skipInstall` <agentDataLocation> 引数を追加します。製品をインストールしたりアンインストールしたりする必要はありません。ただし、<agentDataLocation> は書き込み可能ディレクトリーでなければなりません。この引数を指定すると、Installation Manager は製品のインストールを行わずにインストール・データを保存します。同じ <agentDataLocation> を次の記録セッションで使用することで、製品の更新や変更を記録したり、ライセンス管理を記録したりできます。`-skipInstall` 引数を使用しないと、リポジトリーの設定を含め、インストール時に設定した製品のインストール内容や設定は保管されません。`-skipInstall` を使用した場合、IM は製品をインストールするのではなく、単にインストール・データを記録しているだけなので、インストール時間が短縮されます。

`skipInstall` 引数を使用する場合の構文は、IBMIM -record <応答ファイルのパスと名前> -skipInstall <エージェント・データ・ロケーションの書き込み可能ディレクトリー> です。例えば、IBMIM -record c:\mylog\responsefile.xml -skipInstall c:\temp\recordData となります。

注: 入力するファイル・パスが存在することを確認してください。Installation Manager では、応答ファイルとログ・ファイル用のディレクトリーは作成されません。

3. 「パッケージのインストール」ウィザードの指示に従って、インストール・オプションを選択します。詳しくは、39 ページの『Installation Manager GUI の使用による Rational Systems Developer のインストール』を参照してください。
4. 「終了」をクリックして Installation Manager を閉じます。

コマンドで指定したロケーションに XML 応答ファイルが作成されます。

Installation Manager インストーラーによる応答ファイルの記録

Installation Manager インストーラーを使用して、Installation Manager やその他の製品のインストールを記録することができます。

Installation Manager のインストールを記録するには、次の手順に従ってください。

1. Installation Manager を unzip して、InstallerImage_platform ディレクトリーに移動します。
2. 記録を開始するには、install -record <応答ファイルのパスおよび名前> -skipInstall <agentDataLocation> -vmargs -Dcom.ibm.cic.agent.hidden=false と入力します。

インストーラーによる製品インストールの記録

Installation Manager インストーラーを使って製品インストールの記録を開始するには、次の手順に従ってください。

1. Installation Manager を unzip した場所にある InstallerImage_platform ディレクトリーに移動します。

2. 行 `-input` および `@osgi.install.area/install.xml` を削除して、`install.ini` ファイルを開きます。
3. コマンド `install -record <応答ファイルのパスおよび名前> -skipInstall <agentDataLocation>` を入力します (例: `install -record`)。
4. `Installation Manager` を開始して、「パッケージのインストール」ウィザードを完了します。

サイレント・モードでの Installation Manager のインストールおよび実行

`Installation Manager` インストーラーを使用して `Installation Manager` をインストールした後、`Installation Manager` を使用して製品パッケージをサイレント・インストール・モードでコマンド行からインストールします。

サイレント・モードでの実行方法に関するその他の資料については、`Installation Manager` の Web サイトを参照してください。例えば、認証 (ユーザー ID とパスワード) を必要とするリポジトリからのサイレント・インストールなど。

次の表は、サイレント・インストール・コマンドで使用される引数を示したものです。

引数	説明
<code>-vm</code>	Java ランチャーを指定します。サイレント・モードでは、必ず <code>java.exe</code> (Windows の場合) または <code>java</code> (その他のプラットフォームの場合) を使用します。
<code>-nosplash</code>	スプラッシュ画面を非表示にすることを指定します。
<code>--launcher.suppressErrors</code>	JVM エラー・ダイアログを非表示にすることを指定します。
<code>-silent</code>	<code>Installation Manager</code> インストーラーまたは <code>Installation Manager</code> をサイレント・モードで実行することを指定します。
<code>-input</code>	<code>Installation Manager</code> への入力として XML 応答ファイルを指定します。応答ファイルには、インストーラーまたは <code>Installation Manager</code> が実行するコマンドが含まれています。
<code>-log</code>	(オプション) サイレント・インストールの結果を記録するログ・ファイルを指定します。ログ・ファイルは XML ファイルです。

`Installation Manager` インストーラーと `Installation Manager` の両方に、引数のデフォルト値が表形式で収められている初期化ファイル、つまり `.ini` ファイル `silent-install.ini` が用意されています。

`Installation Manager` インストーラーを使用して `Installation Manager` をインストールします。次の手順に従って、`Installation Manager` のサイレント・インストールを実行します。

Installation Manager のサイレント・インストールを実行するには、インストーラーを `unzip` し、`eclipse` サブディレクトリーに切り替えて、次のコマンドを使用します。

- Windows の場合: `installc --launcher.ini silent-install.ini -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例: `installc --launcher.ini silent-install.ini -log c:\mylogfile.xml`
- その他のプラットフォームの場合: `install --launcher.ini silent-install.ini -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例: `install --launcher.ini silent-install.ini -log /root/mylogs/mylogfile.xml`

Installation Manager がインストールされたら、Installation Manager を使用してその他の製品をインストールすることができます。また、Installation Manager インストーラーを使用して製品をインストールすることもできます。

Installation Manager をサイレント・モードで実行するには、`eclipse` サブディレクトリーから次のコマンドを実行します。

- Windows の場合: `IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -input <応答ファイルのパスおよび名前> -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例: `IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -input c:\mylog\responsefile.xml -log c:\mylog\silent_install_log.xml`
- その他のプラットフォームの場合: `IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -input <応答ファイルのパスおよび名前> -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例: `IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -input /root/mylog/responsefile.xml -log /root/mylog/silent_install_log.xml`

Installation Manager インストーラーを使用して製品のサイレント・インストールを実行する場合は、`eclipse` ディレクトリーから、次のコマンドを入力します。

- Windows の場合: `installc.exe --launcher.ini silent-install.ini -input <応答ファイルのパスおよび名前> -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例: `installc --launcher.ini silent-install.ini -input c:\mylog\responsefile.xml -log c:\mylog\silent_install_log.xml`
- その他のプラットフォームの場合: `install.exe --launcher.ini silent-install.ini -input <応答ファイルのパスおよび名前> -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例: `IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -input /root/mylog/responsefile.xml -log /root/mylog/silent_install_log.xml`

Installation Manager インストーラーまたは Installation Manager がサイレント・インストール・モードで実行された場合は、応答ファイルを読み取り、指定したディレクトリーにログ・ファイルを書き込みます。サイレント・インストール・モードで実行する場合、応答ファイルは必須ですが、ログ・ファイルはオプションです。この実行の結果、成功時は状況 `ゼロ`、失敗時はゼロ以外の数値が返されます。

すべての使用可能な製品の検索とサイレント・インストール

すべての使用可能な製品に対する更新をサイレントで検索してインストールすることができます。

すべての使用可能な製品を検索してサイレントでインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリーの eclipse サブディレクトリーに移動します。
2. 以下のコマンドを入力して実行します。応答ファイルおよびログ・ファイル (オプション) の個所には、ご使用のロケーションを指定してください。
 - Windows の場合: `IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -installAll -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`
 - その他のプラットフォームの場合: `IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -installAll -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`

Installation Manager に認識されているすべての使用可能な製品がインストールされます。

現在インストールされているすべての製品に対する更新のサイレント・インストール

現在インストールされているすべての製品に対する更新をサイレントで検索してインストールすることができます。

すべての使用可能な製品に対する更新を検索してサイレントでインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリーの eclipse サブディレクトリーに移動します。
2. 以下のコマンドを入力して実行します。応答ファイルおよびログ・ファイル (オプション) の個所には、ご使用のロケーションを指定してください。
 - Windows の場合: `IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -updateAll -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`
 - その他のプラットフォームの場合: `IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -updateAll -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`

Installation Manager で認識されているすべての使用可能な製品の更新がインストールされます。

応答ファイルのコマンド

Installation Manager のサイレント・インストール機能を使用する場合は、Installation Manager で実行する必要があるすべてのコマンドを含む応答ファイルを作成する必要があります。これを行う際に推奨されるのは、IBM Rational Systems Developer パッケージのインストール時のアクションを記録することによって、応答ファイルを作成する、という方法です。ただし、応答ファイルは手動で作成したり編集したりすることができます。

応答ファイルのコマンドには、以下の 2 つのカテゴリがあります。

- 「設定」コマンドは、「ファイル」→「設定」と選択したときに、Installation Manager で表示される設定 (リポジトリ・ロケーション情報など) を行う場合に使用します。
- サイレント・インストール・コマンドは、Installation Manager で「パッケージのインストール」ウィザードをエミュレートするために使用します。

サイレント・インストール設定コマンド

通常は「設定」ウィンドウを使用して設定を指定しますが、サイレント・インストール中に使用する応答ファイルに設定 (キーとして識別されます) を指定することもできます。

注: 応答ファイルには、複数の設定を指定できます。

応答ファイルに設定を定義する場合、使用する XML コードは次の例のようになります。

```
<preference
  name = "the key of the preference"
  value = "the value of the preference to be set">
</preference>
```

次の表を使用して、サイレント・インストール設定用のキーとそれに関連した値を識別します。

キー	値	注
com.ibm.cic.common.core.preferences.logLocation	Installation Manager のログ・ファイルのロケーションを指定します。	重要: このキーはオプションで、テストとデバッグ用に設計されています。ログ・ファイルのロケーションが未指定である場合、Installation Manager のサイレント・インストールと UI バージョンでは両方とも同じロケーションが使用されます。
com.ibm.cic.license.policy.location	リモート・ライセンス・ポリシー・ファイルを置く場所を定義する URL を指定します。	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyEnabled	True または False	「False」がデフォルト値です。
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyUseSocks	True または False	「False」がデフォルト値です。
com.ibm.cic.common.core.preferences.SOCKS.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	

キー	値	注
com.ibm.cic.common.core.preferences.SOCKS.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyEnabled	True または False	「False」がデフォルト値です。
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences.eclipseCache	c:¥IBM¥common (Windows) /opt/IBM/common (Linux) 注: 上記のパスは、この設定のデフォルト値です。一般に、インストール・パッケージにはこの設定に対し独自の値が用意されています。	この場所は、すでにパッケージをインストール済みの場合は変更できません。
com.ibm.cic.agent.core.pref.offering.service.repositories.areUsed	True または False	使用不可にするには、この設定を「False」に変更します。 「True」の場合は、製品をインストールまたは更新するときに、リンクされているすべてのリポジトリが検索されます。

キー	値	注
com.ibm.cic.common.core.preferences. preserveDownloadedArtifacts	True または False	使用不可にするには、この設定を「False」に変更します。 「True」の場合は、前のバージョンへのパッケージのロールバックに必要なファイルがシステムに格納されません。「False」の場合は、これらのファイルは格納されません。これらのファイルを格納しない場合、オリジナルのリポジトリまたはメディアに接続しなければロールバックすることはできません。

サイレント・インストール・コマンド

この表を参照すると、サイレント・インストール中に使用する応答ファイル・コマンドについてさらに詳細がわかります。

応答ファイルのコマンド	説明
<p>プロファイル</p> <pre><profile id="プロファイル (パッケージ・グループ) ID" installLocation="the install location of the profile"> <data key="キー 1" value="値 1"/> <data key="キー 2" value="値 2"/> </profile></pre>	<p>このコマンドは、パッケージ・グループ (またはインストール・ロケーション) を作成する場合に使用します。指定したパッケージ・グループがすでに存在する場合は、このコマンドの効果はありません。現時点では、プロファイルを作成すると、サイレント・インストールでは以下の 2 つのインストール・コンテキストも作成されます。1 つは Eclipse 向けで、もう 1 つは native 向けです。プロファイルは、インストール・ロケーションです。</p> <p>プロファイルのプロパティを設定するには、<data> 要素を使用します。</p> <p>現在サポートされているキーおよび関連する値は次のリストのとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • eclipseLocation キーは、 c:¥myeclipse¥eclipse など、既存の Eclipse ロケーション値を指定します。 • cic.selector.nl キーは、zh、ja、en など、自然言語 (NL) のロケール選択を指定します。 <p>注: NL 値が複数ある場合はコンマで区切ります。</p> <p>現在サポートされている言語コードは次のリストのとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 英語 (en) • フランス語 (fr) • イタリア語 (it) • 中国語 (簡体字) (zh) • ロシア語 (ru) • 中国語 (繁体字) (台湾) (zh_TW) • 中国語 (繁体字) (香港) (zh_HK) • ドイツ語 (de) • 日本語 (ja) • ポーランド語 (pl) • スペイン語 (es) • チェコ語 (cs) • ハンガリー語 (hu) • 韓国語 (ko) • ポルトガル語 (pt_BR)

応答ファイルのコマンド	説明
<pre> リポジトリ <server> <repository location="http://example/ repository/"> <repository location="file:/C:/ repository/"> <!--add more repositories below--> <...> </server> </pre>	<p>このコマンドは、サイレント・インストール中に使用するリポジトリを指定する場合に使用します。リモート・リポジトリを指定する場合は URL または UNC パスを使用し、ローカル・リポジトリを指定する場合はディレクトリー・パスを使用します。</p>
<pre> インストール <install> <offering profile= "プロファイル ID" features= "フィーチャー ID" id= "offering id" version= "offering version"></offering> <!--add more offerings below> <...> </install> </pre>	<p>このコマンドを使用して、インストールするインストール・パッケージを指定します。</p> <p>プロファイル ID は、既存のプロファイル、またはプロファイル設定コマンドで作成されたプロファイルと一致している必要があります。</p> <p>フィーチャー ID は、コンマで区切られたリスト (「feature1, feature2」など) によって、オプションで指定できます。フィーチャー ID が指定されていない場合は、指定の製品のすべてのデフォルト・フィーチャーがインストールされます。</p> <p>バージョン番号は必須ではありません。バージョン番号を指定しない場合、Installation Manager は、指定された ID を持つ最新の製品と、使用可能なすべての更新およびフィックスをインストールします。</p> <p>注: 必須のフィーチャーは、コンマで区切られたリストで明示的に指定されていない場合であっても、インストール用に含まれます。</p>
<pre> <install modify="true"> または <uninstall modify="true"> (オプション属性) <uninstall modify="true"> <offering profile="プロファイル ID" id="ID" version="バージョン" features="-"/> </uninstall> </pre>	<p>既存のインストールを変更することを指示する場合は、install コマンドおよび uninstall コマンドの <install modify="true"> 属性を使用します。この属性が true に設定されていない場合、値はデフォルトで false に設定されます。変更操作を、追加の言語パックをインストールすることだけを目的に行う場合、製品フィーチャー ID リストでハイフン「-」を使用して、新しいフィーチャーを追加するわけではないことを指示する必要があります。</p> <p>重要: 例で指定しているように、「modify=true」とハイフン「-」から成るフィーチャー・リストを指定してください。そうしないと、install コマンドでは製品のデフォルト・フィーチャーがインストールされ、uninstall コマンドではすべてのフィーチャーが除去されます。</p>

応答ファイルのコマンド	説明
<p>アンインストール</p> <pre><uninstall> <offering profile= "プロファイル ID" features= "フィーチャー ID" id= "offering id" version= "offering version"></offering> <!--add more offerings below> <...> </uninstall></pre>	<p>このコマンドは、アンインストールするパッケージを指定する場合に使用します。</p> <p>プロファイル ID は、既存のプロファイル、またはプロファイル・コマンドで指定されたプロファイルに一致している必要があります。さらに、フィーチャー ID が指定されていない場合は、指定の製品のすべてのフィーチャーがアンインストールされます。製品 ID が指定されていない場合は、指定のプロファイル内のすべてのインストール済み製品がアンインストールされます。</p>
<p>ロールバック</p> <pre><rollback> <offering profile= "プロファイル ID" id= "製品 ID" version= "製品バージョン"> </offering> <!--add more offerings below <...> </rollback></pre>	<p>このコマンドは、指定したオフリングを、指定したプロファイルに現在インストールされているバージョンからロールバックする場合に使用します。 rollback コマンドでフィーチャーを指定することはできません。</p>
<p>すべてインストール</p> <pre><installALL/></pre> <p>注: このコマンドは、次のコマンドを使用した場合と同等です。</p> <pre>-silent -installAll .</pre>	<p>このコマンドは、すべての使用可能なパッケージをサイレントで検索し、インストールする場合に使用します。</p>
<p>すべて更新</p> <pre><updateALL/></pre> <p>注: このコマンドは、次のコマンドを使用した場合と同等です。</p> <pre>-silent -updateAll .</pre>	<p>このコマンドは、すべての使用可能なパッケージをサイレントで検索し、更新する場合に使用します。</p>

応答ファイルのコマンド	説明
<p>ライセンス</p> <pre data-bbox="435 262 818 317"><license policyFile="policy file location"/></pre> <p>例:</p> <pre data-bbox="435 390 911 422"><license policyFile="c:%mylicense.opt"/></pre>	<p>このコマンドは、レコード・モードで Installation Manager を始動してからライセンス・ウィザードを開始することで、license コマンドを入れる応答ファイルを生成する場 合に使用します。</p> <p>レコード・モード時に、ライセンス管理ウィザードでフレックス・オプションを設定すると、設定されたオプションは、生成された応答ファイルと同じディレクトリーにある「license.opt」という名前のライセンス・ポリシー・ファイルに記録されます。応答ファイルには、そのポリシー・ファイルを参照する license コマンドが入ります。</p>
<p>ウィザード</p> <pre data-bbox="435 741 781 795"><launcher -mode wizard -input < response file ></pre>	<p>このコマンドは、UI モードで Installation Manager を始動する場合に使用します。UI モードでは、インストール・ウィザードまたはアンインストール・ウィザードのいずれかで、Installation Manager を始動します。ただし、この場合、応答ファイルには preference コマンドと install コマンド、または preference コマンドと uninstall コマンドしか入れることができません。Installation Manager を UI モードで実行する場合は、同じ応答ファイルに install コマンドと uninstall コマンドを一緒に入れることはできません。</p>

参照: サンプル応答ファイル

XML ベースの応答ファイルを使用すると、サイレント・インストール設定、リポジトリーのロケーション、インストール用プロファイルなどの事前定義情報を指定できます。応答ファイルは、インストール・パッケージをサイレントでインストールし、インストール・パッケージのロケーションと設定を標準化するチームや会社に役に立ちます。

サンプル応答ファイル

```
<agent-input >

<!-- add preferences -->
<preference name="com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyEnabled"
value="c:/temp"/>

<!-- create the profile if it doesn't exist yet -->
<profile id="my_profile" installLocation="c:/temp/my_profile"></profile>

<server>
<repository location=
"http://a.site.com/local/products/sample/20060615_1542/repository/"></repository>
</server>
<install>
<offering profile="my_profile" features="core" id="ies"
version="3.2.0.20060615">
</offering>
</install>
</agent-input>
```

サイレント・インストール・ログ・ファイル

サイレント・インストール・ログ・ファイルを使用すると、サイレント・インストール・セッションの結果を検査できます。

サイレント・インストール機能によって、XML ベースのログ・ファイルが作成されます。このログ・ファイルには、サイレント・インストールを実行した結果が記録されます。これは、`-log <ログ・ファイル・パス>.xml` を使用して、ログ・ファイル・パスが指定されている場合です。サイレント・インストール・セッションが正常に行われた場合、ログ・ファイルには、`<result> </result>` のルート要素のみが含まれます。しかし、インストール中にエラーが発生した場合は、以下のようなエラー要素が、メッセージとともにサイレント・インストール・ログ・ファイルに記録されます。

```
<result>
<error> Cannot find profile: profile id</error>
<error> some other errors</error>
</result>
```

詳細な分析については、`Installation Manager` データ域に生成されたログを参照してください。設定コマンドを使用することにより、選択したロケーションにデータ域をオプションで設定できます (応答ファイルのトピックを参照)。

ライセンスの管理

インストールした IBM ソフトウェアおよびカスタマイズしたパッケージのライセンス交付は、IBM Installation Manager の「ライセンスの管理」ウィザードを使用して管理されます。「ライセンスの管理」ウィザードには、インストール済みの各パッケージのライセンス情報が表示されます。

バージョン 7.0 以降の Rational 製品の一部については、インストール後 30 日または 60 日で試用ライセンスの有効期限が切れます。有効期限後に引き続き使用するには、製品をアクティブにする必要があります。

「ライセンスの管理」ウィザードを使用して、プロダクト・アクティベーション・キットをインポートすることで、本製品の試用バージョンを、ライセンス交付を受けたバージョンにアップグレードできます。トライアル・ライセンスまたはパーマネント・ライセンスを持つ本製品に対し、フローティング・ライセンスの適用を有効にして、ライセンス・サーバーのフローティング・ライセンス・キーを使用することもできます。

Rational 製品のライセンスの管理について詳しくは、次を参照してください。

- Rational 製品のアクティベーションに関する技術情報: <http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21250404>
- Rational のライセンス交付に関するサポート・ページ: <http://www.ibm.com/software/rational/support/licensing/>

ライセンス

IBM Rational ソフトウェア製品の購入者として、許可ユーザー・ライセンス、許可ユーザー期限付使用权 (FTL)、およびフローティング・ライセンスの 3 つのタイプの製品ライセンスの中から選択することができます。どのタイプのライセンスが組織に最適であるかは、製品を使用する人数、アクセス頻度、ソフトウェア購入の方針などによって異なります。

許可ユーザー・ライセンス

IBM Rational 許可ユーザー・ライセンスは、1 人の特定の個人に対して Rational ソフトウェア製品の使用を許可します。購入者は、製品にアクセスする個々のユーザーごとに、任意の方法で許可ユーザー・ライセンスを入手する必要があります。許可ユーザー・ライセンスの再割り当ては、割り当てた元のユーザーを購入者が長期間または永久に置き換える場合を除いて、許可されません。

例えば、許可ユーザー・ライセンスを 1 つ購入した場合、そのライセンスをある特定の個人に割り当てることができます。割り当てられた個人は、Rational ソフトウェア製品を使用することができます。許可ユーザー・ライセンスでは、いかなる場合も (ライセンス交付を受けた個人が製品を使用中でない場合でも) その製品を使用する権利を他者に与えることはありません。

許可ユーザー期限付使用权

IBM Rational 許可ユーザー期限付使用权 (FTL) は、1 人の特定の個人に対して特定期間 Rational ソフトウェア製品の使用を許可します。購入者は、製品にアクセスする個々のユーザーごとに、任意の方法で許可ユーザー FTL を入手する必要があります。許可ユーザー FTL の再割り当ては、割り当てた元のユーザーを購入者が長期間または永久に置き換える場合を除いて、許可されません。

注: パスポート・アドバンテージ・エクスプレス・プログラムで許可ユーザー FTL を購入した場合、ライセンス満了前に購入者が IBM に延長を希望しないことを通知しない限り、IBM は現行価格でライセンス期間をさらに 1 年間自動的に延長します。継続 FTL 期間は、最初の FTL 期間の満了時に開始されます。この継続 FTL の価格は、現在、最初の FTL 価格の 80 パーセントですが、変更される可能性があります。

ライセンス期間を延長する意思がないことを IBM に通知した場合は、ライセンス満了時に製品の使用を中止しなければなりません。

フローティング・ライセンス

IBM Rational フローティング・ライセンスは、複数のチーム・メンバーで共用することができる、単一のソフトウェア製品に対するライセンスです。ただし、同時ユーザーの総数は、購入したフローティング・ライセンスの数を超えてはいけません。例えば、Rational ソフトウェア製品のフローティング・ライセンスを 1 つ購入した場合、組織内の任意のユーザーが任意の時期に製品を使用することができます。製品にアクセスしたい他のユーザーは、現行ユーザーがログオフするまで待たなければなりません。

フローティング・ライセンスを使用するには、フローティング・ライセンス・キーを入手して、Rational License Server にインストールする必要があります。サーバーは、ライセンス・キーへのアクセスを要求するエンド・ユーザー要求に応じます。サーバーは、その組織が購入したライセンス数と同じ数の同時ユーザーにアクセスを許可します。

ライセンスの使用可能化

Rational ソフトウェア製品を初めてインストールする場合、または製品の使用を継続するためにライセンスを延長したい場合に、製品のライセンスを使用可能にする方法を選択します。

Rational Software Delivery Platform 製品のライセンスを使用可能にするには、以下の 2 つの方法があります。

- プロダクト・アクティベーション・キットをインポートする方法
- Rational Common Licensing を使用可能にし、フローティング・ライセンス・キーにアクセスする方法

注: バージョン 7.0 以降の Rational 製品の一部については、インストール後 30 日または 60 日で試用ライセンスの有効期限が切れます。有効期限後に引き続き使用するには、製品をアクティブにする必要があります。アクティベーション

ン・プロセスのフローチャートについては、プロダクト・アクティベーションに関するサポート記事 (support article) を参照してください。

アクティベーション・キット

プロダクト・アクティベーション・キットには、Rational のトライアル製品のパーマネント・ライセンス・キーが含まれています。アクティベーション・キットを購入し、その Zip ファイルをローカル・マシンにダウンロードしてから、その Jar ファイルをインポートし、製品のライセンスを使用可能にします。IBM Installation Manager を使用して、製品にアクティベーション・キットをインポートします。

フローティング・ライセンスの適用

オプションで、フローティング・ライセンス・キーを入手して、IBM Rational License Server をインストールすることで、ご使用の製品にフローティング・ライセンスを適用できます。フローティング・ライセンスを適用すると、次のような利点があります。

- 組織全体におけるライセンス準拠の徹底
- ライセンス購入数の削減
- 同じライセンス・サーバーからの、IBM Rational Team Unifying 用および Software Delivery Platform デスクトップ製品用のライセンス・キーの供給

注: バージョン 7.0 以降の Rational 製品については、Rational ライセンス・サーバーのアップグレード・バージョンが必要となる場合があります。ライセンスのアップグレード情報については、サポート記事 (support article) を参照してください。

アクティベーション・キットおよびフローティング・ライセンスの入手方法について詳しくは、ライセンスの購入を参照してください。

インストール済みパッケージのライセンス情報の表示

IBM Installation Manager からインストール済みパッケージのライセンス情報を確認することができます。ライセンス情報には、ライセンス・タイプおよび有効期限が含まれています。

ライセンス情報を表示するには、以下のようにします。

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. メインページで「**ライセンスの管理**」をクリックします。

インストールされているパッケージごとに、パッケージのベンダー、現行ライセンス・タイプ、および有効期限が表示されます。

プロダクト・アクティベーション・キットのインポート

パーマネント・ライセンス・キーをインストールするには、IBM Installation Manager を使用して、ダウンロード・ロケーションまたは製品メディアからアクティベーション・キットをインポートする必要があります。

アクティベーション・キットを購入していない場合、まず購入する必要があります。製品またはプロダクト・アクティベーション・キットを購入している場合は、該当する CD を挿入するか、IBM パスポート・アドバンテージからアクセス可能なワークステーションにアクティベーション・キットをダウンロードします。アクティベーション・キットは、Java アーカイブ (.jar) ファイルを含む Zip ファイルとしてパッケージされています。この .jar ファイルにはパーマネント・ライセンス・キーが含まれています。製品をアクティブにするには、このキーをインポートする必要があります。

アクティベーション・キットの .jar ファイルをインポートして、新しいライセンス・キーを使用可能にするには、次のようにします。

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. メインページで「**ライセンスの管理**」をクリックします。
3. パッケージを選択して「**アクティベーション・キットのインポート**」ボタンをクリックします。
4. 「**次へ**」をクリックします。 選択したパッケージの詳細 (現行のライセンスの種類、ライセンスの対象となる製品バージョンの範囲など) が表示されます。
5. アクティベーション・キットのメディア CD またはダウンロード・ロケーションのパスを参照して、適切な Java アーカイブ (JAR) ファイルを選択し、「**開く**」をクリックします。
6. 「**次へ**」をクリックします。「**要約**」ページに、アクティベーション・キットのインストール宛先ディレクトリー、新規ライセンスが適用される製品、およびバージョン情報が表示されます。
7. 「**終了**」をクリックします。

パーマネント・ライセンス・キーを含むプロダクト・アクティベーション・キットが製品にインポートされます。「**ライセンスの管理**」ウィザードに、インポートが正常に行われたかどうかが表示されます。

フローティング・ライセンスの使用可能化

チーム環境がフローティング・ライセンスの適用をサポートしている場合は、製品に対してフローティング・ライセンスを使用可能にし、フローティング・ライセンス・キーへのアクセスを取得するように接続を構成することができます。

フローティング・ライセンスの適用を可能にする前に、管理者からライセンス・サーバー接続情報を入手してください。ライセンス・サーバー、ライセンス・キー、および Rational Common Licensing の管理について詳しくは、「*IBM Rational* ライセンス管理ガイド」を参照してください。

「**ライセンス管理ガイド**」の最新版は、http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/rationalsdp/v7/rc1/701/docs/install_instruction/install.html でオンラインで入手可能です。

フローティング・ライセンスを指定のパッケージのライセンス・タイプとして使用可能にし、ライセンス・サーバー接続を構成するには、次のようにします。

1. IBM Installation Manager for the Rational Software Delivery Platform で、「**ファイル**」 → 「**開く**」 → 「**ライセンスの管理**」の順をクリックします。

2. パッケージのバージョンを選択して、「フローティング・ライセンス・サポートの設定」ボタンを選択します。
3. 「次へ」をクリックします。
4. 「フローティング・ライセンスの適用を可能にする」ボタンをクリックします。
5. 1 つ以上のライセンス・サーバー接続を構成します。
 - a. 「サーバー」テーブルの空フィールドをクリックするか、「追加」ボタンをクリックします。
 - b. 管理者から冗長サーバー環境の情報が提供されている場合、「冗長サーバー」ボタンをクリックします。1 次サーバー、2 次サーバー、および 3 次サーバーの名前フィールドと、ポートのフィールドが表示されます。
 - c. 「名前」フィールドに、ライセンス・サーバーのホスト名を入力します。
 - d. (オプション) ファイアウォールを使用している環境では、「ポート」フィールドに値を入力します。管理者から指示が無い限り、このポートには値を割り当てないでください。
 - e. 冗長サーバー環境の場合、必要に応じて 2 次サーバーと 3 次サーバーの名前およびポートを入力します。
 - f. (オプション) 「接続のテスト」ボタンをクリックして、接続情報が正しいかどうか、サーバーが使用可能であるかどうかを確認できます。
 - g. 「OK」をクリックします。
6. 「次へ」をクリックします。
7. (オプション) シェル共有パッケージまたはカスタム・パッケージのライセンス使用順序を構成します。リスト内のライセンスの順序によって、ご使用のパッケージが特定のライセンス・パッケージのライセンス・キーへのアクセス取得を試みる順序が決定します。
8. 「終了」をクリックします。

「ライセンスの管理」ウィザードに、フローティング・ライセンスの構成が正常に行われたかが示されます。

これによって、使用可能にした製品を次回開いた際に、ライセンス・サーバーに接続して、使用可能なフローティング・ライセンス・キーのプールからライセンス・キーを入手することができます。

ライセンスの購入

現行の製品ライセンスの有効期限が切れる場合、またはチーム・メンバー用に追加の製品ライセンスが必要な場合は、新規ライセンスをご購入いただけます。

ライセンスを購入して製品を使用可能にするには、以下のステップを完了してください。

1. 購入するライセンスのタイプを決定します。
2. ibm.com[®] にアクセスするか、IBM 営業担当員に連絡を取り、製品ライセンスを購入します。詳しくは、IBM Web ページのソフトウェアのご注文方法をご覧ください。
3. 購入したライセンス・タイプに応じて、受け取ったライセンス証書を使用し、以下のいずれかを実行して製品を使用可能にします。

- 製品の許可ユーザー・ライセンスを購入した場合は、パスポート・アドバンテージにアクセスし、記載されている説明に従って、プロダクト・アクティベーション・キットの Zip ファイルをダウンロードします。アクティベーション・キットをダウンロードしたら、Installation Managerを使用して、プロダクト・アクティベーションの .jar ファイルをインポートする必要があります。
- 製品のフローティング・ライセンスを購入した場合は、IBM Rational ライセンスおよびダウンロード (IBM Rational Licensing and Download) サイト へのリンクをクリックして、ログインし (IBM への登録が必要です)、次に IBM Rational ライセンス・キー・センター (IBM Rational License Key Center) に接続するためのリンクを選択します。そこで、ライセンス証書を使用して、ご使用のライセンス・サーバーのフローティング・ライセンス・キーを取得できます。

オプションで、パスポート・アドバンテージにアクセスして、製品のアクティベーション・キットをダウンロードすることもできます。アクティベーション・キットをインポートした後に、長期間コンピューターをオフラインで使用する場合は、フローティング・ライセンス・タイプからパーマネント・ライセンス・タイプに切り替えることができます。

この後、アクティベーション・キットをインポートするか、製品のフローティング・ライセンス・サポートを使用可能にする場合は、IBM Installation Manager の「ライセンスの管理」ウィザードを使用します。

Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす

重要: 最適な結果を得るためには、Rational 製品を使用して作業する前に、Rational Systems Developer で使用できるファイル・ハンドルの数を増やしてください。プロセス当たりのデフォルト限度数である 1024 個よりも多く使用するためです。(この変更はシステム管理者が行う必要があります。)

以下のこれらのステップに従って Linux でファイル記述子を増やす場合は注意してください。指示に正確に従わないと、コンピューターが正しく始動しなくなる可能性があります。最適な結果を得るために、システム管理者にこの手順を実行してもらってください。

ファイル記述子を増加するには、以下のようにします。

1. root としてログインします。root アクセスがない場合は、継続する前に獲得する必要があります。
2. etc ディレクトリーに移動する。
3. vi エディターを使用して etc ディレクトリー内の initscript ファイルを編集する。このファイルがない場合は、vi initscript と入力して作成してください。

重要: ファイル・ハンドルの数を増やす場合は、コンピューター上に空の initscript ファイルを残さないでください。残した場合、次回電源をオンにしたり再始動した場合に、マシンが始動しなくなります。

4. 1 行目に「ulimit -n 4096」と入力する (ここで重要なのは、この数値がほとんどの Linux コンピューターでのデフォルト値である 1024 よりもかなり大きな数値である点です)。注意: この数をあまり高く設定しないでください。システム全体のパフォーマンスに重大な影響を及ぼす可能性があります。
5. 2 行目に eval exec "\$4" と入力する。
6. ステップ 4 と 5 を完了したことを確認した後、ファイルを保管して閉じる。

注: ステップを正しく実行したことを確認してください。正しく実行しないと、マシンがブートしなくなります。

7. オプション: etc/security ディレクトリーにある limits.conf ファイルを変更してユーザーまたはグループを制限します。SUSE Linux Enterprise Server (SLES) バージョン 9 と Red Hat Enterprise Linux バージョン 4.0 の両方で、このファイルがデフォルトで用意されています。このファイルがない場合は、ステップ 4 でもっと少ない数 (例えば 2048) を指定することができます。これは、プロセスごとに許容できるオープン・ファイルに対して比較的低い制限をほとんどのユーザーが持てるようにするために必要です。ステップ 4 で比較的低い数字を使用した場合は、これを行うことはそれほど重要ではありません。ただし、ステップ 4 で高い数字を選択した場合は、limits.conf ファイルに限度を設定しないとコンピューターのパフォーマンスに重大な影響があります。

以下は、すべてのユーザーを制限して、後で異なる限度を設定した場合に、サンプルの `limits.conf` ファイルがどのように見えるかを示したものです。このサンプルでは、前述のステップ 4 で記述子を 8192 に設定したことを想定していません。

```
*      soft nofile 1024
*      hard nofile 2048
root   soft nofile 4096
root   hard nofile 8192
user1  soft nofile 2048
user1  hard nofile 2048
```

上記サンプルの * は、最初にすべてのユーザーの限度を設定するために使用されます。これらの限度は、その後の限度よりも低くなっています。root ユーザーにオープンされている許容記述子の数はこれより高くなり、user1 はその 2 つの間になります。変更を行う前に、`limits.conf` ファイルに含まれている文書を必ず読んで理解しておいてください。

`ulimit` コマンドについて詳しくは、`ulimit` のマニュアル・ページを参照してください。

Rational Systems Developer の開始

Rational Systems Developer は、デスクトップ環境またはコマンド行インターフェースから開始できます。

Windows の場合: 「スタート」 → 「プログラム」 → <パッケージ・グループ名> → 「IBM Rational Systems Developer」 → 「IBM Rational Systems Developer」をクリックします。例えば、「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM Software Delivery Platform」 → 「IBM Rational Systems Developer」 → 「IBM Rational Systems Developer」の順にクリックします。

Rational Systems Developer をコマンド行から開始する場合は、以下のようになります。

- Windows の場合: <product installation directory>%eclipse.exe -product com.ibm.rational.rsd.product.ide
- Linux の場合: <product installation directory>/eclipse -product com.ibm.rational.rsd.product.ide

重要: Windows Vista オペレーション・システムで、Rational Systems Developer のインストール・ロケーションまたは共用リソース・ディレクトリーがパス C:\Program Files 内のディレクトリーにある場合は、Rational Systems Developer を管理者として実行しなければなりません。管理者として実行するには、プログラムのショートカットを右クリックして、「管理者として実行」をクリックします。

Windows Vista では、Program Files ディレクトリーは、管理者以外のユーザーがこの保護下のディレクトリーへの書き込み権限を持つことができるように、常に仮想化されます。ただし、仮想化の解決策は、Rational Systems Developer には対応していません。

パス C:\Program Files 内でインストール・ロケーションまたは共用リソース・ディレクトリーを選択したときに、管理者として Rational Systems Developer を実行する必要がない場合は、次の手順のいずれかに従ってください。

- パス C:\Program Files 内のディレクトリーでインストール・ロケーションを選択した場合は、Rational Systems Developer (および同じインストール・ロケーションを共有しているその他のプログラム) を再インストールして、パス C:\Program Files 以外のインストール・ロケーションを選択します。
- パス C:\Program Files 内の共用リソース・ディレクトリーを選択した場合は、Rational Systems Developer およびすべての Rational Software Delivery Platform 製品パッケージを (そのインストール・ロケーションに関係なく) 再インストールし、パス C:\Program Files 以外の共用リソース・ディレクトリーおよびインストール・ロケーションを選択します。

インストールの変更

IBM Installation Manager の「パッケージの変更」ウィザードで、インストール済み製品パッケージの言語およびフィーチャーの選択を変更できます。

デフォルトでは、リポジトリ設定がローカル更新サイトを指していない限り、インターネットへのアクセスが必要になります。詳しくは、Installation Manager のヘルプを参照してください。

注: Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じてから、変更を開始してください。

インストール済み製品パッケージを変更するには、以下のようになります。

1. Installation Manager の「スタート」ページから、「パッケージの変更」アイコンをクリックします。
2. 「パッケージの変更」ウィザードで、Rational Systems Developer 製品パッケージのインストール・ロケーションを選択し、「次へ」をクリックします。
3. 「言語」の「変更」ページでパッケージ・グループの言語を選択して、「次へ」をクリックします。パッケージのユーザー・インターフェースおよびドキュメンテーションについて、対応する各国語翻訳がインストールされます。この選択は、このパッケージ・グループにインストールされたすべてのパッケージに適用されることに注意してください。
4. 「フィーチャー」ページで、インストールまたは除去するパッケージ・フィーチャーを選択します。
 - a. フィーチャーの内容を知りたい場合は、そのフィーチャーをクリックして、「詳細」で簡単な説明を確認します。
 - b. フィーチャー間の依存関係を表示するには、「**依存関係の表示 (Show Dependencies)**」を選択します。フィーチャーをクリックすると、それに依存するフィーチャーとその従属フィーチャーが、「依存関係」ウィンドウに表示されます。パッケージ内のフィーチャーを選択したり除外したりすると、Installation Manager は、他のフィーチャーとの依存関係を自動的に強制し、ダウンロード・サイズおよびインストールに必要なディスク・スペース所要量を更新して表示します。
5. フィーチャーの選択が終了したら、「次へ」をクリックします。
6. インストール・パッケージを変更する前に「要約」ページで選択内容を確認し、次に「変更」をクリックします。
7. オプション: 変更プロセスが完了したら、「ログ・ファイルの表示」をクリックして完了ログを確認します。

Rational Systems Developer の更新

IBM Installation Manager でインストールされたパッケージの更新をインストールできます。

デフォルトでは、リポジトリ設定がローカル更新サイトを指していない限り、インターネットへのアクセスが必要になります。

各インストール済みパッケージには、それぞれのデフォルトの IBM 更新リポジトリのロケーションが組み込まれています。Installation Manager によって IBM 更新リポジトリ・ロケーションでインストール済みパッケージを検索する場合は、「リポジトリ」の設定ページで「インストールと更新を行っている間にサービス・リポジトリを検索します」を選択する必要があります。この設定はデフォルトで選択されています。

詳しくは、Installation Manager のヘルプを参照してください。

注: Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じてから、更新を開始してください。

製品パッケージの更新を検索してインストールするには、次のようにします。

1. Installation Manager の「スタート」ページで、「**パッケージの更新**」をクリックします。
2. IBM Installation Manager がシステム上で検出されない場合、または古いバージョンがすでにインストールされている場合は、最新リリースのインストールを続行する必要があります。ウィザードの指示に従って、IBM Installation Manager のインストールを完了します。
3. 「パッケージの更新」ウィザードで、更新する Rational Systems Developer 製品パッケージがインストールされているパッケージ・グループのロケーションを選択するか、「**すべて更新 (Update All)**」チェック・ボックスを選択して、「**次へ**」をクリックします。Installation Manager は、そのリポジトリ内、および Rational Systems Developer の事前に定義した更新サイトで更新を検索します。プログレス・バーに検索状況が表示されます。
4. パッケージの更新が検出されると、「パッケージの更新」ページの各パッケージの下に「**更新**」リストにそれらが表示されます。デフォルトでは、推奨される更新のみが表示されます。「**すべてを表示**」をクリックすると、使用可能なパッケージに対して検出されたすべての更新が表示されます。
 - a. 更新の詳細を知りたい場合は、「更新」をクリックし、「**詳細**」の下の説明を参照してください。
 - b. 更新に関する追加情報が入手可能な場合は、説明本文の最後に「**詳細情報**」リンクが表示されます。このリンクをクリックすると、ブラウザーに情報が表示されます。更新をインストールする前に、この情報を確認しておくようにしてください。

5. インストールする更新を選択するか、「**推奨を選択**」をクリックしてデフォルトの選択を復元します。依存関係のある更新は、自動でまとめて選択およびクリアされます。
6. 「**次へ**」をクリックして続けます。
7. 「ライセンス」ページで、選択した更新のご使用条件を読みます。「**ライセンス**」ページの左側に、選択した更新のライセンスのリストが表示されます。各項目をクリックすると、ご使用条件の本文が表示されます。
 - a. ご使用条件のすべての条項に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックします。
 - b. 「**次へ**」をクリックして続けます。
8. 更新をインストールする前に「**要約**」ページで選択内容を確認します。
 - a. 前のページで行った選択を変更したい場合は、「**戻る**」をクリックして変更を行います。
 - b. そのままで問題なければ、「**更新**」をクリックし、更新をダウンロードしてインストールします。プログレス・バーにインストールの完了パーセントが表示されます。

注: 更新プロセス中に、**Installation Manager** がパッケージの基本バージョンのリポジトリ・ロケーションの入力を求めるプロンプトを表示することがあります。製品を CD またはその他のメディアからインストールした場合は、更新機能を使用するときそれらのメディアを使用できるようにしておく必要があります。
9. オプション: 更新プロセスが完了すると、プロセスの成功を確認したというメッセージが、ページの上部に表示されます。「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、新規ウィンドウで現行セッションのログ・ファイルを開きます。続行するには、「**インストール・ログ**」ウィンドウを閉じる必要があります。
10. 「**終了**」をクリックしてウィザードを閉じます。

前のバージョンへの更新の復帰

IBM Installation Manager の「パッケージのロールバック」ウィザードを使用することで、パッケージの更新を削除して前のバージョンに戻すことができます。

ロールバック・プロセスの際、Installation Manager は前のバージョンのパッケージのファイルにアクセスする必要があります。デフォルトでは、これらのファイルはパッケージをインストールしたときにコンピューターに保管されます。ただし、パッケージをリポジトリからインストールした場合は、ファイルはコンピューター上で使用できません。前のバージョンの製品をインストールしたときのリポジトリを、「設定」（「ファイル」>「設定」>「リポジトリ」）にリストしておく必要があります。製品を CD またはその他のメディアからインストールした場合は、ロールバック・フィーチャーを使用するときにそれらのメディアを使用できるようにしておく必要があります。

更新を製品パッケージに適用した後で、その更新を削除して製品を前のバージョンに戻す場合は、ロールバック・フィーチャーを使用します。ロールバック・フィーチャーを使用する場合、Installation Manager は更新されたリソースをアンインストールして、前のバージョンのリソースを再インストールします。1 度に 1 つのバージョン・レベルにしかロールバックできません。

詳しくは、Installation Manager のオンライン・ヘルプまたはインフォメーション・センターを参照してください。

更新を前のバージョンに戻す場合は、次の手順に従ってください。

1. 「スタート」ページで、「パッケージのロールバック」をクリックします。
2. 「ロールバック」ウィザードで、「インストール・パッケージ」リストから、前のバージョンに戻すパッケージを選択します。
3. ウィザードの指示に従います。

Rational Systems Developer のアンインストール

Installation Manager の「アンインストール」パッケージ・オプションを使用すると、1 つのインストール・ロケーションから複数のパッケージをアンインストールできます。すべてのインストール・ロケーションからインストール済みのすべてのパッケージをアンインストールすることもできます。

パッケージをアンインストールするには、製品パッケージをインストールするために使用したのと同じユーザー・アカウントを使用して、システムにログインする必要があります。

パッケージをアンインストールするには、以下のようにします。

1. Installation Manager を使用してインストールしたプログラムを閉じます。
2. 「スタート」ページで「パッケージのアンインストール」をクリックします。
3. 「パッケージのアンインストール」ページで、アンインストールする Rational Systems Developer 製品パッケージを選択します。「次へ」をクリックします。
4. 「要約」ページでアンインストールするパッケージのリストを確認してから「アンインストール」をクリックします。アンインストールが終了すると、「完了」ページが表示されます。
5. 「終了」をクリックしてウィザードを終了します。

IBM Packaging Utility

IBM Packaging Utility ソフトウェアを使用すると、製品パッケージをリポジトリにコピーできます。リポジトリは、HTTP または HTTPS を介して使用可能な Web サーバーに置くことができます。

Packaging Utility ソフトウェアは、Rational Systems Developer に同梱されている、各プラットフォーム (Windows および Linux) 用の Enterprise Deployment CD にあります。Rational Systems Developer パッケージを含まリポジトリを HTTP または HTTPS 上で使用可能な Web サーバーに置く場合は、Packaging Utility を使用して、Rational Systems Developer 製品パッケージをリポジトリにコピーする必要があります。

このユーティリティーを使用して、以下のタスクを実行します。

- 製品パッケージ用新規リポジトリの生成。
- 新規リポジトリへの製品パッケージのコピー。複数の製品パッケージを 1 つのリポジトリにコピーできます。したがって、組織内に共通のロケーションを作成し、そこから IBM Installation Manager を使用して製品をインストールできます。
- リポジトリからの製品パッケージの削除。

Packaging Utility の使用法について詳しくは、このツールのオンライン・ヘルプを参照してください。

Packaging Utility のインストール

IBM Packaging Utility を使用して Rational Systems Developer 製品パッケージをコピーするには、事前に Enterprise Deployment CD からこのユーティリティーをインストールしておく必要があります。

次のステップに従って、IBM Packaging Utility ソフトウェアを Enterprise Deployment CD からインストールしてください。

1. 該当プラットフォームに対する Enterprise Deployment CD に移動して、CD から Zip ファイルを取り出します。
2. Packaging Utility ディレクトリに移動し、圧縮ファイル (pu.disk_win32.zip または pu.disk_linux.zip) から Packaging Utility インストール・パッケージを解凍します。
3. Packaging Utility インストーラーの実行可能ファイルを探します。
 - Windows の場合: pu.disk_win32.zip ファイルの解凍が実行された場所にある InstallerImage_win32 ディレクトリに移動します。インストーラーの実行可能ファイル "install.exe" を探します。
 - Linux の場合: pu.disk_linux.zip ファイルの解凍が実行された場所にある InstallerImage_linux ディレクトリに移動します。インストーラーの実行可能ファイル "install" を探します。

4. インストーラーの実行可能ファイルを開始し、ウィザードの指示に従って Packaging Utility をインストールします。
5. IBM Installation Manager がワークステーション上に検出されない場合は、それをインストールするようプロンプトが表示され、インストール・ウィザードが開始します。ウィザードの指示に従って、Installation Manager のインストールを完了します。詳しくは、31 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。
6. Installation Manager のインストールが完了したら、あるいは、すでにコンピューター上にある場合は、Installation Manager が開始し、自動的に「パッケージのインストール」ウィザードが開始します。
7. 「パッケージのインストール」ウィザードの説明に従って、インストールを完了します。

Packaging Utility を使用した HTTP サーバーへの製品パッケージのコピー

HTTP または HTTPS サーバー上にリポジトリを作成する場合は、Packaging Utility を使用して、Rational Systems Developer の製品パッケージをコピーする必要があります。

この方法では、Rational Systems Developer インストール・イメージと一緒に組み込まれているオプション・ソフトウェアはコピーされないことに注意してください。IBM Installation Manager を使用してインストールされる Rational Systems Developer ファイルしかコピーされません。

また、Packaging Utility を使用すると、複数の製品パッケージを 1 つのリポジトリ・ロケーションにまとめることができます。詳しくは、Packaging Utility のオンライン・ヘルプを参照してください。

Packaging Utility を使用して製品パッケージをコピーするには、以下のようになります。

1. CD イメージからコピーする場合は、以下のタスクを実行します。
 - a. 1 枚目のインストール CD を CD ドライブに挿入します。
 - b. Linux の場合: CD ドライブをマウントします。
 - c. システムで自動実行が使用可能になっている場合は、Rational Systems Developer ランチパッド・プログラムが自動的に開きます。ランチパッド・プログラムを閉じます。
2. Packaging Utility を開始します。
3. ユーティリティのメインページで、「製品パッケージのコピー」をクリックします。「前提条件」ページが開き、以下の 2 つのオプションが表示されます。
 - **IBM Web から製品パッケージをダウンロードします**
 - **他のソースから製品パッケージを取得します**
4. 「**IBM Web から製品パッケージをダウンロードします**」をクリックします。

注: すでにアクセス可能なリポジトリを定義している場合は、「他のソースから製品パッケージを取得します」オプションを使用できます。

5. 「次へ」をクリックして、「ソース」ページに進みます。選択する製品パッケージが無い場合は、製品パッケージが含まれているリポジトリを開く必要があります。
6. リポジトリを開くには、「リポジトリを開く」ボタンをクリックします。「リポジトリを開く」ウィンドウが開きます。

注: リポジトリは、ファイル・システム内のディレクトリーへのパス、1 枚目の製品 CD が含まれているディスク・ドライブ、またはサーバー上のディレクトリーの URL です。

7. リポジトリ・ロケーションを定義するには、リポジトリ・ロケーションの「参照」ボタンをクリックし、リポジトリ・ロケーションにナビゲートして選択します。リポジトリ・ロケーションは、電子ディスク・イメージが含まれている「共通ルート・ディレクトリー」、または 1 枚目の製品インストール CD が含まれているドライブになります。例えば、Rational Systems Developer ファイル (disk1、disk2 など) が C:\My product\unzip にある場合は、このロケーションをリポジトリとして定義します。
8. 「OK」をクリックしてリポジトリ・ロケーションを定義し、「リポジトリ・ディレクトリーの参照」ウィンドウを閉じます。
9. 「宛先」ページで、「参照」ボタンをクリックし、製品の保管先として、既存のリポジトリ・ディレクトリーを選択するか、または新規フォルダーを作成します。
10. 選択した製品パッケージおよびフィックス用のリポジトリを指定したら、「OK」をクリックして「ディレクトリーを参照」ウィンドウを閉じます。定義したファイル・パスが、「宛先」ページの「ディレクトリー」フィールドにリストされます。
11. 「次へ」をクリックして、「要約」ページに進みます。「要約」ページに、宛先リポジトリにコピーされる選択済み製品パッケージが表示されます。また、このページには、コピーに必要なストレージ・スペースの量およびドライブ上で使用可能なスペースの量もリストされます。
12. 「コピー」をクリックして、選択済み製品パッケージを宛先リポジトリにコピーします。ウィザードの下部に、コピー・プロセスにあとどのくらいの時間がかかるかを示すステータス・バーが表示されます。コピー・プロセスが終了すると、「完了」ページが開き、正常にコピーされた製品パッケージがすべて表示されます。
13. 「終了」をクリックして、Packaging Utility のメインページに戻ります。

Packaging Utility を使用して Rational Systems Developer インストール・ファイルをリポジトリにコピーしました。これで、Web サーバー上にリポジトリを置き、HTTP 上で使用可能なディレクトリーおよびファイルを作成できます。(リポジトリは、UNC ドライブにも置くことができます。)

オプション・ソフトウェアのインストール

以下のオプション・ソフトウェアが Rational Systems Developer インストール・イメージに組み込まれています。

- IBM Rational ClearCase LT バージョン 7.0.1

ClearCase LT のインストール

Rational ClearCase LT は、小規模なプロジェクト・チーム向けの構成管理ツールです。ClearCase LT は、小規模なプロジェクト・ワークグループから、分散されたグローバル企業まで対応する、IBM Rational ClearCase 製品ファミリーの一部です。

インストール・メディアには、Rational ClearCase LT バージョン 7.0.1 が入っています。これは、Rational Systems Developer とは別個にインストールされます。

ClearCase LT が既にワークステーションにインストールされている場合は、それを現行バージョンにアップグレードできます。旧バージョンからのアップグレードについては、ClearCase LT のインストール文書を参照してください。

Rational Systems Developer と ClearCase LT を連携させて作業できるようにするには、Rational ClearCase SCM アダプター・フィーチャーをインストールする必要があります。デフォルトでは、このフィーチャーは Rational Systems Developer をインストールする際に選択されていますが、これを組み込まなかったとしても、IBM Installation Manager の「パッケージの変更」ウィザードを使用して、後でインストールできます。詳しくは、67 ページの『インストールの変更』を参照してください。

Rational ClearCase SCM アダプターは、有効にしてからでなければ使用できません。アダプターを有効にして使用方法について詳しくは、オンライン・ヘルプを参照してください。

ClearCase LT のインストール説明およびリリース情報の探索

Rational ClearCase LT をインストールする場合の詳細な説明については、ClearCase LT インストール・メディアに添付されているインストール文書を参照してください。また、製品のインストール前に、ClearCase LT リリース情報を一読されることを強くお勧めします。

一部の文書は、Acrobat PDF ファイルになっています。ファイルを開くには、Adobe Reader ソフトウェアが必要です。これは、<http://www.adobe.com/products/acrobat/readstep2.html> からダウンロードできます。

Windows の場合: インストールの説明およびリリース情報は、ClearCase LT インストール・ランチパッドから表示できます。80 ページの『Rational ClearCase LT のインストールの開始』を参照してください。

インストールの説明を開くには、次のようにします。

- Windows の場合: 1 枚目の ClearCase LT インストール CD (または電子イメージのディスク・ディレクトリー) から、doc¥books¥install.pdf を開きます。
- Linux の場合: ダウンロード手順については、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=pub1gi11636600> を参照してください。

IBM Publications Center からの文書の取得

Rational ClearCase LT のインストール説明およびリリース情報は、IBM Publications Center からダウンロードすることもできます。

1. <http://www.ibm.com/shop/publications/order> にアクセスします。
2. Publications Center の「Welcome」ページで、国/地域を選択します。
3. 「マニュアル検索」をクリックします。
4. 該当する検索フィールドに、文書タイトルまたは資料番号を入力します。
 - 文書をタイトルで検索するには、「キーワード」フィールドにタイトルを入力します。
 - 文書を資料番号 (資料 ID) で検索するには、「資料番号」フィールドに番号を入力します。

表 1. ClearCase の資料番号

文書	資料番号
IBM Rational ClearCase、ClearCase MultiSite [®] 、ClearCase LT Windows インストールおよびアップグレードガイド	GI88-8709-00
IBM Rational ClearCase、ClearCase MultiSite、ClearCase LT インストールおよびアップグレードガイド (UNIX [®])	GI88-8710-00
IBM Rational ClearCase LT Release Notes	GI11-6369-01

Rational ClearCase LT のインストールの開始

このセクションでは、Rational ClearCase LT のインストール・プロセスの開始について説明します。製品をインストールする場合は、「Rational ClearCase LT Installation Guide」に記載の詳細なインストール説明を参照してください。インストールの前に、リリース情報を一読されることを強くお勧めします。

Windows への Rational ClearCase LT のインストールの開始

1. 次のいずれかの方法を使用して、Rational ClearCase LT ランチパッド・プログラムを開始します。
 - Rational Systems Developer ランチパッド・プログラム (38 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照) から、「**Rational ClearCase LT**」をクリックします。
 - Rational ClearCase LT の 1 枚目の CD を挿入します。ランチパッド・プログラムが自動的に始動します。プログラムが実行されない場合は、その CD またはディスク・イメージのルートから、`setup.exe` を実行してください。
2. リリース情報をまだ読んでいない場合は、一読します。
3. 「**IBM Rational ClearCase LT のインストール**」をクリックします。Rational ClearCase LT セットアップ・ウィザードが開きます。

セットアップ・ウィザードの指示に従って、インストールを完了します。

Rational ClearCase LT ライセンスの構成

Rational Systems Developer が Rational ClearCase LT と同じコンピューターにインストールされている場合は、Rational ClearCase LT のライセンスの構成を行う必要はありません。しかし、Rational ClearCase LT を Rational Systems Developer なしでインストールする場合は、ClearCase LT のライセンスの構成を行う必要があります。

ライセンスの構成について詳しくは、ClearCase LT のインストール・ガイド を参照してください。

特記事項

© Copyright IBM Corporation 2004, 2007. All rights reserved.

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-8711

東京都港区六本木 3-2-12

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様自身の責任でご使用ください。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

*Intellectual Property Dept. for Rational Software
IBM Corporation
20 Maguire Road
Lexington, Massachusetts 02421-3112
U.S.A.*

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

- ClearCase
- IBM
- ibm.com
- MultiSite
- Passport Advantage
- Rational
- Rational Unified Process
- RequisitePro
- Rose
- RUP
- SoDA
- XDE
- WebSphere

Adobe は、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標です。

Intel、および Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft および Windows は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。



Printed in Japan

GI88-4100-06



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12